

S.K



Anchor

アンカー



「しかし、最後まで耐え忍ぶ者は、救われる」マタイ24:13

「イエス・キリストは、

きのうも、きょうも、いつまでも変わらない」

コリント13:8

第14号

1994.3.21

変 目 次 化

記事

変革時代のアドベンチズム	金城重博	1
アドベンチズム（再臨運動）の変化	ケビン・D・ポールソン	10
異宗婚委員会への反論	津嘉山繁	17
ユダヤ人はなぜイエスをメシヤとして拒んだか？	フレデリック・G・ギルバート	27
連載 ダニエル11：40～「終わりの時」		32
ながめることー精神の法則		9
伝道に新しい動向？		16
ラオデキヤに大変化（神がもたらす）		32
イエズス会の影響？		44
テープでメッセージ（お知らせ）		45
神の約束ー苦境の時に		裏表紙

コラム

アンカーの目的

我々は次のことを信じてアンカーを出版している。

1. 我々、SDAの働きと使命は三天使の使命である。（6T384, 2SM142）
2. 第三天使の使命は人々をキリストの再臨の栄光の前に立ち得る特別な備えをさせるものである。（9T98, 大下140）
3. 第三天使の使命は人々の心を至聖所に向ける。そこにおいて信者は最後の、特別なあがないを受けるとする。（初文414, , 5, 7）
4. 我々は神のもくろまれたこの特別な祝福、特別な体験を拒み続けてきた。特に1888年以来。（RH/26, 1890）
5. ダニエル8：14の聖句は再臨信仰の土台であり、み業の完成はこの聖句の正しい理解にかかっている。（生き残る人々422, エEV221, 5T575）
6. エレン・G・ホワイトは聖書の預言者と同様の靈感が与えられた預言者である。（1SM36）
7. 最後の時代の嵐に押し流されないようにさせるアンカー（錨）は、三重の使命、聖所、安息日、人の性質、イエスの証（預言の霊）等である。（初文417, 1T300）
8. アンカーはリレーの最終走者の意味がある。この世代は福音の働きが信者の中に、外の世界に完成する最後の時代である。不信仰によって、150年も時が延ばされ、イエスの十字架の苦しみを増している。（大下182, 教育328）。信仰による義認の体験によって、再臨を早めることをキリストは待って おられる。再臨とみ業完成をこれほど遅らせているのが我々神の民であるとするならば、我々の今日の 義務は何か、約束のものを受ける条件は何なのかを研究し、共に備えたいと思う。
9. セブンスデー・アドベンチストは最後の「残りの民」である。たとい教会がどんなに背教しようとも、厳しい震いの経験をして、純潔な教会となり、永遠の神の目的がこの教会によって成就されると信じる。

変革時代の の

セブンスデー・アドベンチズム

金城重博

1990年から変革、激変の時代に突入したと言われている。

90年代、今世紀最後の10年—その初期は政治的、社会的、経済的、宗教的、環境的な大きな変化に世界中が驚いたものである。ドイツ・ベルリンの壁の崩壊、ソ連のペレストロイカ、東欧諸国の民主化、EC（ヨーロッパ共同体）の急速な動き、アメリカ・クリントン政権の誕生、日本の細川政権の誕生・・・どれをとっても「グローバリゼーション」「ボーダレス」「地球政府樹立」への変化、激変なのである。クリントンを大統領選挙に勝たせたのは、「変化」というキーワードであった。宗教界も急速にローマの傘下に合従しようとして「激変」している。しかし、それらは唐突の出来事のように見えるが、長い間徐々に、静かに一つの目的に向かって変化していたのである。

● プロテスタントも変化してきた。

「カトリック教は以前ほどプロテスタントと広く隔たっていないという主張が、プロテスタントの諸国において唱えられてきたことには、理由がないわけではない。そこには変化があったのである。しかし、その変化は、法王制の中にあつたのではない。なるほどカトリック教は、今日存在しているプロテスタントによく類似している。それはプロテスタントが、宗教改革者の時代以後、ひどく墮落してしまつたからである」大下329

「今日ローマ・カトリック教は、プロテスタントから、過去のどの時代よりもはるかに好感をもってみられている。カトリック主義が優勢ではなくて、カトリック教会が勢力を得るために融和的な態度をとっている国々においては、改革主義の教会を法王教から区別する教理に対してますます関心が薄らいでいる。結局われわれは主要な点では今まで考えられてきたほど広く隔たっていない。われわれの側のわずかな譲歩によってローマとのより良い理解がもたらされるであろう、という意見が有力になってきている。高い犠牲を払って贖った良心の自由に、プロテスタントが高い価値を置いた時代があつた。彼らは子供たちに法王教をきらうように教え、ローマと一致しようとすることは神に対して不忠実であると主張した。しかし、今日表明されている意見は、なんとはなはだしく異なっていることだろう」大下318

「今日プロテスタントが尊敬しようとしている法王制」大下328

「カトリック教は以前ほどプロテスタントと広く隔たつてはいないという主張がプロテスタントの諸国において唱えられてきた」大下329

「祈りをもって聖書を研究するとき、法王制の本質を嫌悪しそれを避けるようになる」大下330

● ローマ・カトリックは変わったか？

「しかし、その変化は、法王制の中にあつたのではない」大下329

「現在ローマ教会は、その恐ろしい残虐行為の記録を弁解しながら世界にもっともらしい顔を見せている。この教会はキリストのような衣を装っている。しかし教会は変っていない」大下328

「自分の目的を達成するのに最も都合のよい性格を身に装うことが、この教会の方針の一つである。しかし、カメレオンのように変りやすい外見の下に、この教会は蛇のように不変の毒を^隠している」大下329

「ローマ教会は決して変らないということがこの教会の自慢の種であることを忘れてはならない」

大下340

● SDAにも変化？

「変化」の波はセブンスデー・アドベンチストにも及んでいるであろうか？よく、SDAは変っていない、原則は変っていないと聞く。そう主張する人は、忠実な真の証人—預言の霊を読んでいないのではないだろうか？神は何と言われるかを、「忠実な真の証人」に聞いてみようではないか？

★ 変化：

W・C・ホワイトによって送られた手紙, Elmshave, 24, 1915: 「1888年再吟味」に引用。

「わたしは我が民に告げるように命じられた：ある人達は悪魔が次々と策略を練って、彼らが思いもしない方法でそれらを遂行することに気がつかない。サタン^のの代理者は聖徒を罪人とする方法を案出するであろう。わたしは今言っておきたい。わたしが死んでから、大きな変化が起るであろう。わたしはいつ召されるかはわからない。しかし、悪魔の策略に対してみんなに警告したい。わたしの死ぬ前に十分に警告したことを我が民に知ってほしい。わたしはどんな変化が起きるかは特に知らない。しかし、サタンが永久化しようとする罪のすべてに注意しているべきである」

★ 原則が変えられる

特別な証、シリーズB、#7 39~40 10-1903

(セレクトッド・メッセージ1巻204、205ページ)：

「魂の敵はセブンスデー・アドベンチストの間で大改革が起るべきであるという推測を持ち込もうとしてきた。この改革は我々の信仰の柱として立ってきた教理を放棄し、組織の再編成に従事することで成り立つというものであった。このようなことが起こったなら、その結果はどうなることであろう？ 神の知恵によって残りの教会に与えられた真理の原則が放棄されるであろう。我々の宗教が変えられるであろう。過去50年間にわたり働きを支えてきた基礎的原則が、誤りと見なされるであろう。新しい組織が確立されるようになる。新しい種類の書物が書かれるようになる。(いわゆる) 知的な哲学(見解)の体系が取り入れられるようになる。この体系の創設者達が都市へ行き、目ざましい働きをするであろう。もちろん安息日は軽視されるようになり、それをお造りになった神も同じく軽視されるであろう。

新しい運動を阻止しようと立ちはんがるものは、何であつても許されないであろう。美德は悪徳にまざると指導者は説くが、神が取り除かれ、神なしでは何の価値もない人間の力（ヒューマンパワー）に彼らは頼るようになるであろう。彼らの基礎は砂の上に建てられ、嵐が吹き荒れると、建物はひとたまりもなく倒壊するのである」 セレクトッド・メッセージ1巻204、205ページ)

◆ 1852年にエペソ教会の熱心で立ち上がった教会は、ラオデキヤ状態に陥る。

◆ 1888年に約束された、使徒時代以来目撃したことのない大リバイバル、

後の雨一大いなる叫びをもたらす一信仰による義認のメッセージを教会は拒む。その結果、かつてないほどの深刻なラオデキヤ状態に変化する。

◆ 1931年に我が教会の教育界に大きな変化が起きる。教育機関の認可に踏込んだ。その変化は、当時の世界総会総理一ワトソン長老、次期総理一マックエルハネー長老、ワトソン長老、ウィルコックス長老、アンダーソン長老、スポルディング長老・・・などを嘆き、悲しませた。その頃に出された記事がギルバート長老の「なぜ、ユダヤ人はイエスをメシヤとして拒んだか」というものであった。

ワトソン長老は「我々は遠くへ行過ぎた。我々は間違っていたことが分った」と言った。ワトソン長老は「私は1931年に原則において間違った道に入った。・・・我々は教育において、また他の標準において世の標準を受け入れるという間違いを犯した」と言った。

◆ 1957年に神学的、教理的な変化が起きた。キリスト教界で教派の研究、カルト（異端、分派）の研究で有名な、福音主義派のバーンハウス博士とマーチン博士が我が教会の指導者のフルーム、アンダーソン、リード、アンルー長老らと何百時間もかけて教理の調整をしたのである。非キリスト教的、珍奇な教えを持つ教派とされてきたSDAはようやくキリスト教界に仲間入りしたと評された。その結果として「**教理に対する質問**」が出版された。

アドベンチスト・ライフ1993年6月号の記事を引用しよう：

「1957年に牧師会主導で『SDA教理への疑い』を発行し、聖書とエレン・G・ホワイトとの関係、キリストの品位、信仰による義認などの聖書主義を明確にすることで、ようやくSDAも一般キリスト教界から好意を持って受け入れられるようになった」 ※キリストの品位は、キリストの性質と訳した方がいいと思う。

しかし、その変化を嘆く者は今日も絶えない。

その当時の敬神深い、神学者としてトップにあった、M・L・アンデレアソンは再臨信仰の土台をゆすぶるものだと次のように嘆きの警告を発した：

「指導者たちが偽りの教理を強制し、反対する者を脅かそうとする危機がこの教団に来了。全く信じられない。幾年も据えられてきた土台を取り除こうとする試みが今なされている。そうすることによって成功すると考えている。もし我々に預言の霊がなければ、今我々を脅かしているような、健全な教理から離脱することが分らないであろう。わが教団を破壊し、ひどい傷をもたらすオメガの到来も分らないであろう」

"How We Got Where We Are" by Kenneth H. Woodに引用。P44。

元レビュー・アンド・ヘラルドの編集長ケネス・ウッドは「どうして我々はこうなったのか？」という論文を書いた。

「我が教会員の一人がくれた手紙の中によく表されている：『1956年まで教会の教えと理解はよく統一されていた。我々はみんな同じことを信じ、教えた。異なった立場をとるものは、なんらかの危惧の目でみられた。しかし、時代は確かに変わった』」

どうして我々はこうなったのだろうか？

教会の歴史を研究する多くの者は、今日の教会の教理的な分裂の根本的原因は1950年代半ばのウォルター・マーチン、ドナルド・バーンハウスとの問答とそれに続く1957年の「教理への質問」の出版にあると指摘する。ある者は、それ以前の1950年のR・J・ウィーランドとD・K・ショートによって出版された「1888年再吟味」に主な原因があるとする。また、ある者は、ロバート・プリンスミードによる聖所覚醒運動と続く活動に今日の神学的混乱が最も大きな原因であるとする（1960年代）。

私は最初のグループに属すると考える。なぜなら、エバンジェリカルな人たちとの問答と「教理に対する質問」の出版が教会内に批評、疑い、不確かさ、うわさ、指導者への信頼の喪失という風潮を作り上げたと思っているからである」 "Why We Got Where We Are" by Kenneth.H.Wood p2

◆ 1977年に我が教会はローマ法王に金メダルをプレゼントした。アドベント・レビュー19778-11

「最近、ローマでもたれたワールド・コンフェショナル・ファミリーの書記たちの協議会に関連して、15人の参加者の一人、北欧-西アフリカ支部総会書記のB・B・ビーチ長老は、唯一のアドベンチストであったが、5-18日に法王パウロ6世に1冊の本と金メダルをプレゼントした」



◆ 1990年、アメリカのインディアナポリスで世界総会が開かれた。その時に、我が教会はB・B・ビーチを通してバチカン教皇庁に正式に代表者を送ってくれと要請した。教皇庁は「ローマ、教皇庁キリスト教一致会議を代表」としてトーマス・J・マーフィー卿を送ってそれに答えたと世界総会報知#7, P8 にあった。B・B・ビーチは代議員たちに彼を次のように紹介した。「『彼はローマ教皇庁キリスト教一致推進協議会を代表するオブザーバーで、ゲストであられます』」（拍手喝采）。

「アーカンソー・カトリック」誌

「アドベンチスト、反カトリックを配布ーインディアナポリス（CNS）ー7月6～14日間にわたってもたれる、2,000人の代議員の集る、55回目の教団世界総会の間、テネシーのセブンスデー・アドベンチストの分派は、インディアナポリスの家庭に知り得ない数の反カトリックの小冊子を郵送した。

教団のスポークスマン、シャーリー・パートンは、インディアナポリス「STAR」新聞にその小冊子は「くず、がらくた」であると伝えた。その小冊子「預言されたアメリカ」は、カトリックを異教の宗教だとし、法王を獣と呼んでいる。

総会に出席していたあるアドベンチストは、パートンの言ったことを取り消すように、反カトリシズムは伝統的なアドベンチストの教理の重要な部分であると主張した。

「Criterion」ーインディアナポリス管区新聞（カトリックの）の編集長、ジョン・フィンクは、『セブンスデー・アドベンチストは、18から19世紀にかけて、他のプロテスタントと同じように反カトリシズムの歴史がある。しかし、教会の主要部は反カトリシズムから移り変わった。たとえば、総会に正式なオブザーバーを送ってほしいとの招待をセブンスデー・アドベンチストからバチカンになされたことに

よってカトリック教会と協力態勢の立場を取っていることが分る。』

インディアナポリス管区の教会一致運動指導者である、トーマス・J・マーフィー神父は、バチカン側からのオブザーバーとして出席し、7月10日、総会で話した。「...小冊子の配布者、発行者とも総会の代議員ではなかった。教団のニュース・ディレクターのハーバード・フォードは、インディアナポリス『STAR』誌に『歴史的な反カトリシズム信仰に執着するアドベンチストは、北アメリカの750、000人の教会員のうちのたった1、000人くらいのものである。』と語った。」この数字は教会が認めているよりもっと大きいものであると主張する他のアドベンチストたちが何百といて全市にまたがるホテルに集っていると云う。」 "アーカンソー・カトリック"、7-29, 1990 P8, (アーカンソー、リトル・ロック、ローマ・カトリック管区によって出版されている)。

何という変化であろう！

大下318-「高い犠牲を払って贖った良心の自由に、プロテスタントが高い価値を置いた時代があった。彼らは子供たちに法王教をきらうように教え、ローマと一致しようとすることは神に対して不忠実であると主張した。しかし、今日表明されている意見は、なんとはなはだしく異なっていることだろう」

我々は預言の霊によって、「不法の者」「罪の人」を暴露し、その世界支配陰謀を暴露する特別な民であると言われている。(TM118、EV195)。不法の人とは法王教である！(大下166、患難上287、288、TM140、7BC911)

「教会と法王教の距離を縮めるのは教会の背教である」 サインズ2-19, 1894

◆北アメリカにおいて年間71%のSDA青年が教会離れ。1988-6アドベント・レビュー。

◆「アドベンチスト レビュー」9-27, 1984 P20

「北アメリカのアドベンチスト大学の40%~45%の男性がビールやぶどう酒や、酒を飲んでいる」とケタリング大学の医学部副学長、ウィントン・ビーベンが発表した。これはアンドリュース大学に最近設立されたアルコール・麻薬中毒研究所の最初の理事会でのことである。『女子学生に関しては、わたしの推計では20~25%である』と言及した。ビーベン副学長は多くの学生と時間をかけて話し合った後、そう断言する十分な根拠を得たと言った」

◆北アメリカでの統計：一般の離婚率が51%、SDAの離婚率が49%。

◆セレブレーション(祝典)スタイルの礼拝の普及。

◆北アメリカである部会の連合青年会の指導者は青年たちをロックコンサートに引率。

◆日本で異宗婚(信者と未信者の結婚)の考え方に変化が起きている!

◆新共同訳を我が教会で取入れるという危険なステップを踏もうとしている!(機会が許される時に、この問題を取上げたい)。

◆その他、ここにあげられない変化がたくさんある。

これらの変化は、何を意味するのであろうか?

キリストの花嫁である教会がキリストの義で武装して最後の戦いに備えることは預言されている。(牧師への勧告17、118)。教会にまもなく「大きな変化をもたらす」後の雨、大いなる叫びが起ることは預言されている。初代文集440。しかし、今我々の教会に見られる変化は、ラオデキヤの深い背教であり、預言者を泣かせ、そして我らの主であり、花婿であるイエスを泣かせているのである。(8T68、5T77 [アンカー第2号を参照])

今回のアンカーに津嘉山繁先生の「異宗婚研究委員会への反論」を載せた。理由は、我が教会の基本的理念に関わることだからである。再臨信仰の原則、残りの教会の標準、聖書、証の書の解釈が今日のいわゆる預言者の言った「Intellectual Philosophy」「知的哲学」-「~学」、”So called false Science”-いわゆる「偽りの科学」によって変えられつつあるのを見るのは忍びないからである。「牧会的配慮」は確かに重要である。未信者と結婚するという過ちを犯したとしても、神は本人の悔い改めと信仰によって、ルツやラハブのように祝福に替えてくださることもなさる。聖書、証の書を正しく解釈することは非常に重要である。それを強調する人々にぜひそうしてほしいと願うものである。指導者は「聖書、証の書を正しく解釈し、書かれた背景をわきまえて」と言うが、彼ら自身SDAの歴史を正しく見ていないこともあるし、靈感の書を解釈するのに正しくなされないこともあるからである。我々は状況倫理で啓示を解釈する危険に直面している。

異宗婚の問題は：①証の書の権威の問題 ②聖書の解釈の問題 ③我が教会の独自性の喪失の問題 ④教会の権威という問題 等に関わってくるので、一例としてこの問題をとりあげてみた。次に記した事は参考までに。

1. 証の書の権威

1994年第1期安息日学校教課70頁：

「聖霊の賜物の一つは預言である。この賜物は残りの教会を特徴づけるしるしの一つであって、エレン・G・ホワイトの働きにおいて現された。主の使者としての彼女の著作は真理についての継続的で権威あるみなもとであって、教会に慰め、導き、教え、矯正を与えるものである。それらはまた、聖書がすべての教えと経験のためす標準であることを明らかにしている」(セブンスデー・アドベンチスト年鑑1992年版7頁)

☆ エレン・G・ホワイトは、ルターや、ウエスレー等のような使命者にしかすぎないのだろうか？聖書の預言者と同じ靈感だろうか？ 靈感に100%の靈感、80%の靈感というのがあるだろうか？

☆ 証の書は真理、教理についての権威ではないのだろうか？

2. 「神は、神の教会を教え、その不正を譴責し信仰を強めておられるか、それともそうでないかのどちらかである。神は、サタンと共同で何もされない。わたしの働きは、・・・神の印を帯びているか、それとも敵の印を帯びているか。この事について中途半端はない。証は神の霊からのものであるか、それとも、悪魔からのものである。」教会への証4巻230頁。

3. 「サタンの最後の欺瞞は神の御霊の証を無効にすることである」セレクトッド・メッセージ1巻48。

☆ 証の書を否定するとは言っていない。「無効にする」と言っているのである。

「サタンの特別な目的」教会への証5巻667。

「人々は次々と計画をたくらんでくるであろう。敵は真理から魂をそそのかすよう努めるであろう。しかし、主はエレン・G・ホワイトを通して語られ、メッセージを与えられたことを信じるすべての者は、最後の時代にやってくる多くの欺瞞から守られるであろう」セレクトッド・メッセージ3巻84。

4. 「時も試練も、与えられた教えを無効にしなかった。・・・この教会の初期に与えられた教えは、その最後の時代にも従うべき間違いのない教えと思うべきである」セレクトッド・メッセージ1巻41。

5. SDAのアイデンティティ（独自性）の喪失？

● 1 T 2 7 7（ク奉仕48）：

「聖書を研究をしてみて、わたしはこの末の世における神の民に驚くのである。彼らは偶像礼拝から離れるように勧告されている。神に仕えている者と仕えていない者を見分けることが困難なほど、彼らは眠り、世に順応しているのではないかとわたしは恐れる。キリストとその民の間の距離はますます遠くなり、神の民と世との間の距離はますます近くなっている。キリストを告白しているものと世の人々との区別のしるしはほとんどなくなってしまう。昔のイスラエルのように、彼らは周囲の国民の憎むべきことをまねている」

● 5 T 7 8：「我々の唯一の安全は神の特殊な民として立つことである」

6. キ実295：「キリストと一体である者と、世に結ばれている者とを区別する天の原則は、ほとんど識別することができなくなっている。キリストに従うと表明する者は、もはや特別にわかたれた民ではない。その境界線は明瞭でない。民は世と、そのならわしと、習慣と、利己主義のとりこになっている。世が教会と共に律法に従わなければならないのに、逆に教会が世と共に律法を犯している状態である。教会は日毎に世に転回しつつある」

7. 原因追及！ 大下78

「真に教会は目覚めて、この悲しむべき状態の原因をつきとめなければならない。なぜなら、シオンを愛するすべての者が、現状をまことに悲しむべき状態と見ているに相違ないからである」ある宗教誌の証言の引用。

※ジョセフ・ウォルフは「どうして、ユダヤ人はイエスを十字架につけたの？」「どうして、エルサレムは滅亡し、ぼくたちは、とらわれの身になっているの？」という追及が7才からはじまり、ついに世界的再臨伝道者になった。

夜半の叫びは1844年に再臨がなかった理由を追及して生まれた。

第三天使の使命は1844年に期待していた再臨がなかったのは何故かを追及して生まれたのであった。

「このような状態は、教会自身に原因がなくして起こるものではない。国家、教会、また個人が陥る霊的暗黒は、神の側で独断的に恵みの助けを取り除かれるのではなくて、人間の側で、神からの光をないがしろにしたり、拒否したりすることによるのである」

- 教会は預言者の言葉にどれほど聞き従っているだろうか？
- 1888年の天からの尊いメッセージを「受け入れた」？預言者は何と言っているだろうか？

8. コリントⅡ6：14～17についての証の書の説明：

牧師への勧告271：

「神の民はどの機関においても神と人の敵と契約を結んではならない。世に対する教会の義務は、世の考えに下りて彼らの意見や提案を受け入れることではない。主の僕パウロを通して語られたキ

リストの言葉に留意してほしい。「不信者と、つり合わないくびきを共にするな。義と不義となんの係わりがあるか。光とやみとなんの交わりがあるか。キリストとベリアルとなんの調和があるか。信仰と不信仰となんの関係があるか。」Ⅱコリント6:14,15。これは、特に未信者との結婚を意味しているが、それ以上の分野、(問題)を網羅する。神に定められた我々の機関、健康の機関、大学、出版所のことを意味する」

SDAコメンタリー6巻876 (エレン・G・ホワイトの言葉ではない)

「これは、クリスチャンが原則をつらぬくことを困難にさせ、または不可能にさせる事情に自らをおくようないかなる未信者との交わりに対しても警告を与えている。この禁止は結婚関係を含んでいるが、それだけに限られているのではない」

●ビジネスなどにおいて、未信者と契約して事業をすることは厳しく戒められている。しかし、もし失敗すれば、契約を破棄することができる。しかし、この地上で、結婚ほど神聖な契りはない。それは簡単に破棄してはいけない。それだけに、パウロの言葉は、特に結婚に当てはまるのではなからうか？

9. 聖書は自分で学び、自分の意見を持って！指導者に頼ってはならない。

●フォーケンバーグ総理：1993年6-21。ライフに引用。

「教会は震われ、倒れるように見えるかも知れないが、最後の戦いを通り抜ける教会なのである。牧師よ、み言葉を語れ、福音のすべてをのべよ。同信の教会員よ、自らのためにみ言葉を学べ、他者に依存してはならない」

●大下353～364

「まもなく最後の大きいなる欺瞞がわれわれの前に展開されようとしている。・・・聖書の真理によって心を堅固にした人たち以外には、だれも最後の大争闘に耐え抜くことはできない。・・・

学識者の意見、科学の推論、教会会議の定めた信条や決議(・・・)、大衆の声、——これらのうちの一つであれ、全部であれ、それをもって信仰上の事柄に関する賛否の根拠と見なしてはならない。どんな教理や戒めでも、それを受け入れる前に、『主はこう言われる』という明白な事実をその裏付として要求すべきである。

サタンはいつも、神の代わりに人間に注意を向けさせようと努力している。彼は、人々が、自分で聖書を探って自分の義務を学ばないで、監督や、牧師や神学者を案内者とするように導く。そうするとき、サタンはこれらの指導者たちの心を支配することによって、大衆を意のままに感化することができるのである。・・・ユダヤ民族に彼らのあがない主を拒否させたのは、このような教師たちの影響であった。・・・

多くの人たちはこのようにしてすぐに自分たちの魂を牧師に預けてしまう。今日、信仰を告白する幾千の人たちは、牧師からそう教えられたということ以外には、自分の信じる信仰の要点について理由を説明することができない。彼らは救いに主の教えにほとんど注意を払わず、牧師たちの言葉に全面的な信頼を置いている。しかし、牧師たちは絶対にが光りを掲げる者であるということを、神のみ言葉によっ

て知らない限り、自分の魂を彼らの指導にゆだねることがどうしてできようか。世の踏みならされた道から踏出す精神的勇気が欠けているため、多くの人々は学識者の道に従い、自ら調べるのに無精であるため、絶望的なまでに誤謬の鎖につながれている。...

正しい意図があったというだけでは足りない。人は自分が正しいと思うことや牧師が正しいということをするだけでは不十分である。自分の魂の救いに関わる問題である以上、人は自分で聖書を探求しなければならない。彼の確信がどんなに強くても、牧師は何が真理かを知っているといくら彼が信頼していても、それは彼の土台とはならない」

- 多数決、アンケートをもってすべて事を評価できるか？
- 5 T 7 9 - 「神の啓示された知恵よりも単なる人間の理性を偶像のように高める精神がある。聖書の真理よりも、あるいはみ霊の証よりも、思い上がり（うぬぼれの強い）、いわゆる学者の意見が信頼されるべきと思っている人たちがいる」

10. 混乱の時

● 1 希 3 1 6 - 「ラビたちは、聖書のみ言葉がある意味にも解釈され、またはそのれと全然反対の意味にも解釈されるかのように、疑いとためらいをもって語った。聞く者たちはますます分らなくなった。しかしイエスは聖書を疑問の余地のない権威のあるものとして教えられた。どんな問題であっても、イエスのみ言葉に反ばくする余地がないかのように、それは力強く語られた」

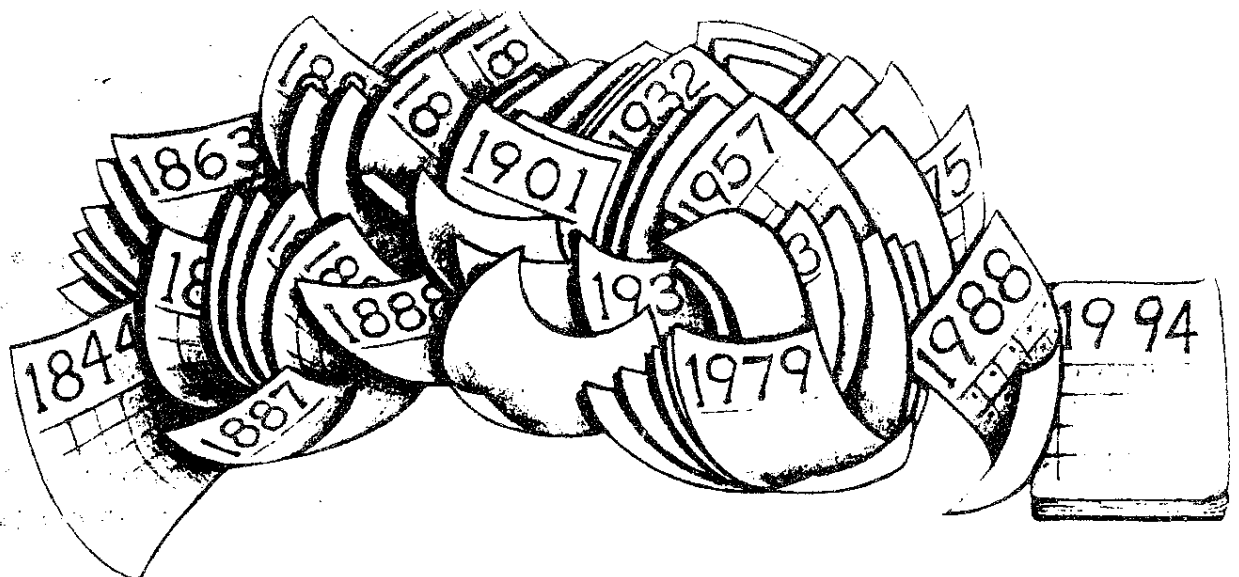
● セレクテッド・メッセージ3巻84。

「人々は次々と計画をたくらんでくるであろう。敵は真理から魂をそそのかすよう努めるであろう。しかし、主はホワイト姉妹を通して語られ、メッセージを与えられたことを信じるすべての者は、最後の時代にやってくる多くの欺瞞から守られるであろう」 ■

変化したい！キリストの精神に！

**「ながめることによって、変化するのは、
人間の精神の法則である。」**

人間は、真理、純潔、聖潔、に関して、自分が持っている観念以上に到達するものではない。もし、精神が、人間的水準以上に高められず、無限の知恵と愛を瞑想するために信仰によって高尚にされないならば、人間は常に低い方へ低い方へ沈んでいくのである」人類のあけぼの上 89



アドベンティズム（再臨運動）の変化

アドベンティズム（再臨運動）の変化

アドベンティズム（再臨運動）の変化

アドベンティズム（再臨運動）の変化

アドベンティズム（再臨運動）の変化

アドベンティズム（再臨運動）の変化

ケビン・D・ポールソン

多くの者は、時が経ちさえすれば成熟するのはあたりまえと思っている。このことは、個人にも、組織にも当てはまるようである。様々な事情の下で経験が積み重なると、能力が増し、理解力も成長すると普通考えられている。変化は進歩の同意語にもなっている。そして、しばしば精練され、調和のとれた精神の究極的なしるしと見られている。

ウィリアム・マンチェスターは次のように言っている：

「変化はアメリカの過去においては絶え間ないテーマであった。合衆国は、変化そのものを礼拝し、また変化と進歩を区別しない、世界で唯一の国である」※1

変化、それは今や、セブンスデー・アドベンチストの間でもますます普及しているテーマである。どこでも一少なくとも、アングロサクソンの国々では一もはや今までのようではないことはよく認められている。かつて我々の神学的体系は、地球上最も統一されたものであると考えられていた。タイム誌は、「教理的に最も落ち着いた順調な信仰」※2 と評したほどであった。今は、幾つかの重要な論題に関して、いろいろ異なった考え方が、我々の出版物に、雑誌に見られる。これらの相違は神、救い、個人的道徳、そしてクリスチャンの信仰本質という考え方に関してさまざまであり、広い分野にわたっている。昔論争されたハルマゲドンや北の王等の論題に関しての統一見解はない。かつて我々が避けた習慣は、許されている一あるものは公式に、そして多くのものは公認されないままに。

我々は聖書とE. G. ホワイトの証の書にもとづく根本的な原則が腐食されつつあるという事実と直面している。たとえば、アルコールは適度であれば許されるべきだとか、同性結婚の許容、さまざまな形の貴金属製装身具類のはやり等といよいよ世俗の圧力は強くかかっている。今までの型にはまった、形式的な礼拝にあきあきして厳粛さに欠けた「セレブレーション」と言われる礼拝がはやりつつある。

他に多くのことを揚げる事ができるであろう。我々はますます教育、医療センターの将来の不確かさに直面している。入学希望者は減少している。負債は増加している。経済的なジレンマのゆえに行政家は徹底した手段、大学の閉鎖も考えざるを得なくなっているとか。社会の複雑さと多様性はますます濃くなる危機的雰囲気をもたらし、そして信徒は教会に対する信頼を失いつつある。

宗教的無感動、無関心

どんなことであろうと無関心は破壊的である。特に、霊的な事柄において信心深く装っているときに、それは致命的である。現代のアドベンチストの多くは、今までは誤って指導され、誤って理解された律法主義と信仰による義にとってかわって、今度はキリストとの暖かい、個人的な交わりが重要だと強調するあまり、教理の純粋さを保ち、靈感の書の勧告を忠実に実行する必要はないと信じるようになってきた。表現は違っても、すべては同じ方向に誘引されていくように思える。現代生活の複雑さの中で我々は、神の書かれたみ旨を行うことは時代遅れだ、また短絡的だ、単純すぎると信じるように指導されている。それでいて信者は、にこにこ顔ですべてはうまくいっていると安心させられる。愛に満ちた、寛大な心のイエス様は、すべてご存知だから、どうにでも救ってくださるよと安心させられる。「意見はいろいろ間違うこともあるが、しかし愛は決して間違うことがない」と宣言する。 のあ・ともし

最近、「聖書、聖書のみ」がアドベンチストの信仰と実践の基準でなければならないとよく言われている。そのこと自体は正しいが、しばしば聖書をあげ、E. G. ホワイトの役割を引き下げる意図で語られている。キリストとの個人的な愛の関係と、教理や、はっきりした神の命令を区別しようとする試みは、聖書のどこにも見られない。「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである。そして、その戒めはむずかしいものではない」Ⅰヨハネ5:03。神はホセアによってこう言われた：「わたしの民は知識がないために滅ぼされる。あなたは知識を捨てたゆえに、わたしもあなたを捨て」と。ホセア4:6。イエスは、「もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは、ほんとうにわたしの弟子なのである」と言われた。ヨハネ4:6。パウロは「それは、神があなたがたを初めから選んで、御霊によるきよめと、真理に対する信仰とによって、救を得させようとし」と言った。2テサロニケ2:13。
理解(愛)あり

E. G. ホワイトは聖書と一致している：

「我々が聖潔な生活を送ることができるのは、カルバリーの十字架上でそそぎ出された生命を自分の為を受けることによってである。そしてこの生命は、キリストのみ言葉を信受し、キリストが命じられたことをなすことによって、受けられるのである。こうして我々は、キリストと一つになる」※3 3希141。

何と言われているか？キリストの「言葉」、すなわち教理を受け入れることと「彼が命じたことをなすこと」—すなわち清められた服従—がキリストと人間の結合の本質である、また次のようにも言われている。

「すべての真理はイエスの生命として受け取られるべきである。真理はすべての不純から清め、キリストの臨在に魂を備える」。※4

現代の預言者は、次のように言っている：「聖書全体はキリストを表わすものである。※5 各時代の希望2 -140

多くの者は、これらの言葉を深く理解もせず口にするが、もし確かに、全聖書がキリストを表わすものであり、すべての真理をイエスの生命として受け取るべきものであるなら、では、8:14や
神の口から出る一つ一つの言葉

→ 各時代の信仰はどう違う？

ダニエル7章の4つの獣は、コリント第1の13章やマタイ5章の山上の垂訓と同じように神の愛を描写しているはずだ。教会への証、青年への使命、食事と食物に関する勧告は、各時代の希望やキリストへの道と同じように神の愛を表わしているのである。多くの者は、靈感から切り離れた無形の、センチメンタルな愛の考え方を発達させ、どの聖句がもっと素敵で、もっと円熟したものであるか、他のものより救いに重要かと決めてしまう。聖書それ自体によって愛とは何か、また救いの原則は何かということ定義させる代わりに、これらの人たちは、自分たちの考え方に靈感を一致させようと努める。我が教会の有力な雑誌に連載された記事を思い出す。それは、1888年以前のエレン・G・ホワイトの神学は律法主義で行いを強調していて、ミネアポリス以後は「円熟した」信仰による義を支持したということを表そうとしているものであった。こんな分析は、預言者自身の証に反する重要な発言である。1890年に発言されたことを見てみよう：

「何年も私が主張したいと思ってきたことは、着せられたキリストの義のことであった。なぜこの事が各地の我が教会で説教の主題にされなかったのかと不思議に思った。この事は絶えずしきりに私をかりたててきたものであり、人々の前でほとんどすべての説教や、話しの主題にしてきた」※6

エレン・G・ホワイトの1888年以前のメッセージを読みながら、信仰による義ではないと思う人たちは、靈感の一致した思想によって正される必要がある。聖書とエレン・G・ホワイトによって教えられている信仰による義は、一般キリスト教会でも聞かれる、またセブンスデー・アドベンチストの講壇でさえ聞かれるような信仰による義ではない。

神の書かれた勧告をそのまま我がものとするだけでキリストを経験する唯一の方法である。「お言葉通り、この身になりますように」という「愛によって働く信仰だけ」が尊いのである。それ以外の方法は、

状況論理

我々を感情や状況にまかせてしまう結果にする。それ以外の方法をとると我々は、ずっと以前に神が我々に詳細に述べられたことの代わりに、セミナーや委員会の決議を受け入れるように導かれる。それ以外の方法が北アメリカのわが教会の70%の青年をたちを裏口から出してしまいう結果にさせているのである。それ以外の方法は、21世紀末期にたちこめる、窒息させるような陰鬱さの中で無力なままに我々を放置するだけである。『言語明瞭、意味不明』

変化のためのあいまいな、不明瞭な叫びは、政治家たちには流行するであろうが、こと聖書に関する限り大変な問題である。今日、次々表される新奇な考えに悩まされ、「時代遅れだ」と団体からは歓迎されない聖書的な説教をする人はなかなか見つからないものである。むしろ、信仰の指標から教会が離れていることを嘆きながらくいとめようと最善を尽くす信徒たちを見る。父祖達の時代から新約時代の終わりまで教会を背教に陥れたのは、神の民に幾度も繰り返された真理に対する怠慢の結果であった。

- ✓ セツの子らがカインの娘たちと雑婚するようになったのは、おそらく古き真理に対する過度な尊敬ではなく、間違つて指導された新奇なものに対する欲求の故であったのだ。（創世記6:2~4）。ソドムに向かってテントを張るようにロトを魅惑したのは彼の霊的な相続を守ろうとする熱心さではなかったのは確かである（創世記13:12）。シナイ山のふもとに金の小牛をつくらせてしまった背教（出エジプト32）、また、ルール・ペオルの背教（民25）、また、エジプトを脱出する前のイスラエルの偶像礼拝と墮落は、昔の霊的な指標を守り通そうという熱望にあるのではなかった。神の言葉が最もはつきりその原因を述べていると思う：

「主はこう言われる、「あなたがたはわかれ道に立って、よく見、いにしへの道につき、良い道がどれかを尋ねて、その道に歩み、そしてあなたがたの魂のために、安息を得よ。しかし彼らは答えて、『われわれはその道に歩まない』と言った」(エレミヤ書6:16)

ある人は、イエスはご自分の福音を保守的なパリサイ主義の皮袋に新しいぶどう酒を入れたというあの言葉を思いだしているかもしれない(マルコ2:21~22)。この聖句はしばしばこんな印象を与えている。つまり、キリストとユダヤ人の間の論争は古い考え方を弁護する保守主義(ユダヤ人)と変革を望む若い自由主義的改革派=リベラル(キリスト)の間の論争であったと。この考え方は誤っている。イエスはパリサイ人の極端な強情さを譴責なさったので、イエスはパリサイ人よりもっと「リベラル」(自由派)のようにしばしば見える。しかし、事實は逆である。この時代のユダヤ人は、昔の聖書と近代の言い伝え、哲学的思想とを取り替えていた。ヘレニズム初期のユダヤ青年の多くはギリシャ哲学の中心地、アレキサンドリヤで学んで、それをまたユダヤ思想に混合したのである。イエスの時代のユダヤ人の宗教的思想を形作った原因はおおかたギリシャ思想によっていた。※7 F.C.Gilbert,「なぜユダヤ人はイエスをメシヤとして拒んだのか?」1933。

我々の多くはラビたちは教理的にコチコチで、恐ろしく独善的であったと思っている。しかしエレン・G・ホワイトは違った描写をしている：

「律法学者たちと長老たちの教えは、つめたくて形式的で、丸暗記した教えのようであった。彼らにとって神のみ言葉は生命力がなかった。彼ら自身の考えと言い伝えとが神のみ言葉の教えと入れ代わっていた。・・・しかし、教えは単純であったが、イエスは権威をもつ者として語られた。この特徴のために、イエスの教えはほかのすべての人たちの教えと対象的だった。ラビたちは、聖書のみ言葉がある意味にも解釈され、またはそれと全然正反対の意味にも解釈されるかのように、疑いとためらいをもって語った。聞く者たちは毎日ますますわからなくなった」※8 2希314。

今日の教会においてあいまいなことを許している者たちはパリサイ人をとやかくいいながら、実は彼らも同じであることに気がついていないのである。靈感のみ言葉を現代哲学や、(人間の良識)状況倫理と混ぜて解釈することが、昔パリサイ人がやったことである。そのために「混乱」が生じたのである。

ケアする教会?

近頃はSDAの教理やはっきりした命令が、あやふやな「ケアリング(配慮、世話する)」というメッセージに入れ替えられている。もちろん、根本的にはケアする教会ということにはまちはない。聡明さ、明快さの欠けたケアリングは感傷主義と区別しにくい。そればかりでなく、他の諸教会もこのアプローチを試みているということは考慮に値する。

1972年に合同メソジスト教会のディーン・ケーリー牧師は、「なぜ、保守的な教会が成長しているか」※9 という本を出版した。健全な聖書的説教を、懷疑主義、高等批評、動揺(優柔不断)に道をゆだねた宗教団体は、なぜ衰えていくかと指摘している。13年後に、ロスアンゼルス・タイムズ誌は、「有力な教会は縮小する」※10 と、この傾向を続けて記事にした。1年以上たってニューズウィーク誌は、次のような見出しの記事を出した。「かつての確立された宗教、リベラルなプロテスタントは羊を失いつつある」※11 と。さらにニューズウィーク誌は、アメリカには聖公会よりはイスラム教が多いことを指摘して、合同メソジスト教会成長の会長、リチャード・ウィルキの言葉を引用している：「我々は、ただ夢ごこ

ちの日の帆船のように漂流しているように思った。それどころか、我々は輸血の効果もない白血病患者のように衰弱しつつある」。※12

この結論は理解できる。一つの神学、あるいは道徳的立場から次のものへとあがいている諸教会は信憑性（しんぴょうせい）を保持できないようである。混乱した世界の住民は、混乱した教会に満足、充実さを求めることは不可能である。20世期末のアメリカの宗教史の教訓は、あまりにも明らかである：靈感の書に対する疑問が教会の空席を作っているのである。思慮ある男女であるならば株式市場のように不確かな宗教の行事に週末の3時間も浪費しないであろう。

セブンスデー・アドベンチストのある者たちは、この現状に全く無関心の様である。ケリー博士は1982年10月にアンドリュース大学を訪れた。そして次のように我が民の危険について警告を発した：「風変わりな特殊な教理はケーキの飾り付けにしか過ぎない、必要なのは愛だけだ、信仰だけだ」と。※13 彼はまた、信仰の弁解をする傾向、教会の信者にそれを訴えたり、提示するのを躊躇（ちゆうちよ）する傾向があると語り、「メソジスト教会では何十年もの間、何をしても教会から追い出されることがなかった」※14 また彼は容赦なく明確に次のように語った：「セブンスデー・アドベンチスト教会が成長するのをどのように止めることができるだろうか？メソジストのようになればいい」※15

聞いておられるだろうか？

「アドベンチスト教会は変わっている」とコーラスが鳴り響く。しかし、アメリカの文化がどうであろうと、クリスチャンにとっては変化と進歩は見分けがつかないものではない。なぜなら、神の民にとって変化とは、現実の状況に順応するように変化することではなく、永遠の神のみ旨と比較して可能性を探ることである。やさしくケアする精神は立派なことであり、必要なことであるが、神のみ旨を知りながらそれを拒むことは全く相いれないことである。時々人道主義的熱心さは、教理に対する忠実さの代わりに主張されるであろう。しばらくはうまくいくように見えることもあろう。しかし、やがて歴史の風向きが変り、状況の洪水が起こり、砂の上に建てた家の崩壊は大きいものとなるであろう。

（マタイ7:7）。

今日、我々はここでまじめな質問をする時に来ている。教理と行動の分裂の増加は、我々の間に無我の精神を生む結果となっただろうか？我が教会で離婚率は低くなっただろうか？（結婚式の指輪をつけることに夢中になることを考える時に、何か重要なものを失っているのではないかと疑いたくなる）。伝統的なアドベンチストの要求にあまり関心を払わない人たちは自己の楽しみより、人類の苦しみを和らげるために金銭を使うだろうか？自由主義の精神を受け入れる青年たちは、物質的な、専門的な成功より、問題を持っている隣人を助けることに興奮を感じるだろうか？

かつてジョン・アダムは言った：「事実は手におえない頑固なものである」と。

最後の分析として言えることは、リベラル（自由主義）な神学はクリスチャンのメッセージの核心を拒否することである。聖書の主旨は信者に古き、よき宗教的真理を破棄させるように説きつけることではなく、古い、罪の人を捨てさせることである。聖書の神は新しい心を与えたいとのぞまれるのであって、新しい考えを要求しておられるのではない。真の悔い改めは、個人の好みに合うような神学を考案させるように導くことではない。それはタルシシのサウロのように「主よ、あなたはわたしに何をしたいのですか？」と尋ねさせる（使徒9:6）。

500頁
この文章
大いなる助け

ラルフ・ワルド・エマーソンは「歴史を分析するにあたっては、あまり深すぎないようにせよ。なぜなら、しばしば原因はわりと表面に在るから」と言った。※16

どんなに長たらしい、しゃれた言葉を並べ立てても、どんなに研究を重ねて、詭弁を使っても、人間が昔から望んでいることは自分のやりたいようにやるということであって、自由主義神学や高等批評といえどもなんら変りはない。エレン・G・ホワイトの言葉に「いろいろ仮面をかぶってはいますが、疑いと不信の真の原因は、たいていの場合、罪を愛することにあります」とある。※17 キリストへの道144。

我々は、神のご計画の内にある真の宗教の役割を全く、はきちがえている。私の友人がある時言った：「宗教的真理とは自分が処理、分析、加工する何かである」と。間違っている！真理が我々を処理加工すべきである。

1. オリフツクことゝ言ふ
2. 何を言ふにせよその心はさうだ
す、ア、ア、ア、ア、ア

今日のアドベンチストの多くは、「さばくな主義」に酔わされて、腰抜けにされている。救い主がさばいてはならないと言われたご命令は（マタイ7:1）、考えや行動の評価をしてはならないことと思ひこんでいる。人の信条や行動を神の書かれた言葉と比較することを戒めていると思ひこんでいる（イザヤ8:20）。イエスのこの言葉を、教理的道徳的な基準を拒否する神学的自由主義の思想と混ぜあわせているのである。我らの主がそんなことを教えておられるはずがない！さばいてはならないと言っている同じ章で、彼はこう言われた：「その実によって彼らを知りなさい」と（マタイ7:20）。

残忍な例をあげて申し訳ない。ある男の人が都会の道路を歩いていたとする。女の人をレイプ（強姦）して、殺した。こんな行動は悪い、卑劣で残虐と描写する事に反対する人は少ないだろう。聖書はもちろん、常識的な作法も悪いことと評価するであろう。しかし、このような人は地獄行きだと言ったとするなら、み言葉は明らかにこのように人をさばいてはならないと戒めている。誰も他人の心を知らない。頼まれてこのような凶悪なことをしたのかもしれない。また、その行為に責任がないとされる場合もある。暗闇のことは神のみがご存知である。すべてなされたことには複雑な窮地、苦境という状況があるものである。人間の運命を決定するのは神のみがなさることである。しかし、人間の言葉、行動が正しいか、間違っているかの基準は神のみ言葉であり、それを知る能力、また義務を神は人に与えておられるのである。

まことに、預言されたように震いが起っている。忠実な教会員がラオデキヤへの率直な証を与えている一方、肉の心を持つ者たちはそれに反対して立ち上がっている。我が民の大部分が震われるであろう。※18 初代文集438。しかし、残る者たちは、ギデオンの300人の兵士たちのようになるであろう。セブンスデー・アドベンチストが自我に死ぬという経験を彼らの生活に証するとき、宇宙的な危機の最も暗い時に、永遠にわたって響きわたる交響曲が奏でられる事であろう。■

1 William Manchester, The Glory and the Dream: A Narrative History of America, 1932-1972 (New York: Bantam Books, 1974), 1296

2 Richard Ostling, "The Church of Liberal Borrowing," Time, August 2, 1982, 49

3 各時代の希望3-141

4 Our High Calling, 209

5 各時代の希望2-140

6 Faith and Works, 18

↓
ローマは黙。
17世紀の初期から → 為(神)民(人)に!
(制度組織) (人)

- 15 -
SDAは「我」の民 為(神)民(人)に

- 7 F.C.Gilbert, 「なぜユダヤ人はイエスをメシヤとして拒んだのか？」 1935
- 8 各時代の希望 1-314
- 9 Dean M.Kelly, Why Conservative Churches Are Growing (New York: Harper & Row, 1972)
- 10 John Dart, "Mainline Church Strength Shrinks: If Trend Continues, Protestants' Liberal Groups Will be in Minority" Los Angeles Times, April 6, 1985, Part 1-A, 5-8
- 11 Kenneth L. Woodward, "From Mainline to Sideline: Once the religious establishment, liberal Protestants are losing their sheep." Newsweek, December 22, 1986, 54-56
- 12 Ibid, 54-56
- 13 Kelly, "How Adventism Can Stop Growing," Ministry, Feb 1983, 7
- 14 Ibid.
- 15 Ibid.
- 16 Ralph Waldo Emerson, quoted in Barbara W. Tuchmann, The March of Folly: From Troy to Vietnam (New York: Alfred A. Knopf, 1984), 23
- 17 キリストへの道 144
- 18 初代文集 438 ■

「伝道の働きに新しい動向（傾向）が持込まれてきた。他教派を真似ようという欲求があつて、単純さと謙遜さはめったに見られない。若い牧師たちは、独創的であることを求め、働きに新しいアイデアを持込もうとする。ある者は伝道集会を開き、その手段によって教会に多くの数を集めようとする。しかし、興奮が終わると改心者はどこにいるのか？ 罪の悔い改めと告白は見られない。罪人は過去の罪と反逆を憂慮することなしに、キリストを信じ受け入れるように訴えられる。心は砕かれぬ。魂の悔恨はない。いわゆる改心したと言われている者たちは、岩なるキリストに落ちていない。」 2 SM 18、19

異宗婚研究委員会への反論

津嘉山繁 (赤城山学園ニュースレターより)

SDA教会員と非SDA教会員との結婚

「SDA信者と未信者の結婚を教会は認めるか否か」

という議論は、もう20年以上くすぶり続けている問題である。でも「教会指針」や「信仰の大要」等には、聖書や証の書の伝統的解釈にもとずいてはつきり否定されているので正面きって反対する者はいなかったが、決してその火種は消えないどころか最近次第に深く広く広がってきたようである。そこで第32回教団総会の決議にもとずき、教団は「異宗婚問題研究委員会」を発足させ、同委員会は早速この問題に取り組み、数々の研究記事やデーターを参考にしながら研究を重ね、中間報告をまとめるに至った。



そしてその中間報告に「SDA教会員と非S教会員の結婚—聖書学的・神学的考察」(高橋義文著)と「日本における牧会的・伝道的考察」(白石尚著)を添えて全牧師に配布してアンケートをとった。賛否両論あったが、こまかい条件をつけ加えた上で賛成を含めると**71%が信者と未信者との結婚に賛成**という圧倒的な支持を得たのである。それから信者の代表というべき長老会にも提示して一応の了解を得たようである。(私が出席した東教区の長老会では決して賛成のGOサインが出たとは思わないが。)

それから牧師たちの中からの反対意見に対する反論も先の両氏から提出され、これらの資料をまとめて同委員会は理事会に対して最終答申案(ガイドライン)を提出してその役目は終わったとしている。

尚、同委員会から理事会に先立って教団理事がその資料に目を通しておくようにとのことで資料が送付されてきた。

ここで私は、まだ教団理事会での討議がなされていない現段階で私見を発表し、先輩諸兄姉のご意見を伺い、それを参考にして教団理事会の討議に加わりたいと思い、赤城山学園ニュースレターの紙面をお借りして公表することにした。しかし私は同委員会が

まとめたような理路整然とした神学的、聖書学的、論理的考察はできないが、少なくとも平凡な一SDA信徒として聖書と証の書を単純に素直に読んで、神様の導きと助けを祈り求めながら、まとめてみたいとペンをとった。

異宗婚研究委員会のまとめ

まず最初に、同委員会が、高橋、白石両牧師の論文を基調としてまとめたと思われるガイドラインを私なりに整理してみた。

- (1) 当委員会のガイドラインは「教会指針」「牧師指針」「信仰の大要」などに示されたSDAの基本原則と姿勢《SDA教会はSDAでない者とSDAとの結婚には賛成しない。SDA教団の牧師はそのような結婚式を司式すべきではない》の変更を意図するものではなく、この確信に疑問をはさむものでもなくその基本原則を堅持する。
- (2) しかしSDA信徒が、すでに未信者との結婚を決意し、その上、未信者の相手もSDA教会の理念を尊重し、それにそうように努める姿勢があり、かつSDA牧師による司式を希望するという限られたケースに限り、十分な指導を与え、またその後もよき交わりをもって導いていく決意のもとに彼らの結婚を認め、司式してもよい。ただしこれは決して(1)の基本的原則を犯すものではなく、あくまでもきわめて限定されたケースに対する例外的処置である。
- (3) このように(1)と(2)とを両立させる理由は下記のとおりである。
 - ① 申命記7:1~4などの異邦人との婚姻の禁止は「神の敵」である異邦人との結婚の禁止であり、(2)のケースの未信者は神の敵ではなく、SDA信仰の反対者、信仰の放棄を迫る人でもなく、よき理解者であり、将来の有望な求道者であるゆえに、このケースに申命記7章の禁止令をあてはめることは当を得ていない。
 - ② コリントII6:14の「不信者とつりあわなくびきを共にするな」との教えは、直接的には結婚の問題ではない(多くの聖書研究者もそう言っている)その上、パウロのこれらの勧告はあくまで勧告であって絶対的規範ではない。我々は明白な「主の言葉」もしくはそれに相当する規定は与えられていないので、この聖句をもって(2)のケースを断罪すべきではない。
 - ③ 証の書の「青年への使命」(443頁)その他で未信者との結婚が強く否定されているが、これもSDA信仰に反対する者との結合のことであるので、

(2) のケースは当てはまらないし、また証の書は一切の例外を否定するような「法的文書」 的性格のものではない。また、聖書に並ぶ権威を有する絶対的永遠不滅の律法とは違って勧告にすぎず、 国柄の違いや事情の違いがある時にはそのまま当てはめるべきではない。

④ **「教会指針」**等は、時代の状況によって変更可能なものであり、現に幾度となく改定を重ねてきた。加えて、世界各地において国情やその土地の事情が異なる場合については正式の手続きをへた上でその地の事情や状況に適應する事項を追加することができる。現に今、他の国においても同じ問題が起っていて検討がなされている。故にこの度のガイドラインはSDAの日本における新しい可能性を探るものであって「指針」にもとるものではない。

⑤ 結婚は単なる社会的結合ではなく、神の意志に起源をもち、旧約では神とイスラエルとの関係、新約ではキリストと教会との関係を象徴するものであるが、結婚が人間の生の在り方のすべてではなく、一つの生きかたにすぎない。故に結婚はしてもよいし、しなくてもよい限定された出来事である。それ故に結婚式はバプテスマや聖餐式のような「神聖な礼典」ではなく、この世的なもの、救いとは次元のちがうものであって罪や救いと直結して取り扱うべき宗教的な問題ではなく、 もっと福音的態度、パウロ的現実的対処が可能である。

⑥ **日本人の宗教観**は特異なもので、各種の宗教をあわせ持つ許容力を持っている。たとえば、家には神棚がありながら結婚式は教会で、葬式は仏教でということもあり得る。そのような国民性を考慮するとき、信仰か結婚かの二者択一的性質を持たないケースもあるので、そのような人は「反対しない者はあなたがたの味方なのである」(ルカ9:50) 故にカナン、コリント、アメリカにおいて語られた不信者との結婚を禁じた言葉を、日本の実情の分析なしにそのまま適應するというのは賢明ではない。

⑦ **日本のSDAの男女(1:2)**という現実を考える時、教会員の中に適当な結婚相手を見つけることが出来ず、やむを得ず未信者との結婚を決心した信者に対して、牧師や教会が支持的に関わる方が得策である。この事に対する一律的な拒否の態度は、現実を無視し、かえって事態を悪化させる。信者と未信者との結婚を戒めた聖書や証の書の言葉を絶対普遍的律法ととるか、信者を守

るための勧告ととるかである。「何が重要であるかを判断」(ピリピ1:10)する必要があり、「『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か知っていたら、あなたがたは罪のない者をとがめなかったであろう」(マタイ12:7)との主の言葉を思い起こす必要がある。

日本のある教会でのアンケート調査結果によると(昭和55年)：

信者で未婚者と結婚した者で教会定期出席率は58%
信者同志結婚した者で教会出席率は45%。

このことからわかることは日本においては安定した信仰生活並びに結婚生活の第一要素は幸か不幸か配偶者が同じ信仰を持っているかどうかではなく、経済的問題、安息日問題である。むしろ教会員の中で一番安定しているのは統計によれば未婚者と結婚している信者である。

そしてもしも牧師や教会が支持的姿勢でこれらの問題に取り組んでいたら、その定着率をもっと上げることができし、今後もよりみ業の進展を見ることができであろう。

故に現実離れた精神主義だけではこの問題の真の解決にはならないのである。

異宗婚研究委員会への反論

以上が同委員会のガイドラインの大要であったと私は理解している。そして私自身いろいろ考えさせらる、反省させられているところもあったし、又多くの未婚女性の悩みや未婚者との結婚に踏切った姉妹たちの悩みに同情しながらも同委員会のガイドラインには多くの疑問を感じる。「つかさたる者、長老たる者が先だって、このとがを犯しました」(エズラ9:2~3)との聖書の言葉が心にとまり、「驚きあきれてすわった」(同9:3)エズラと同じ心境と言ってしまえば、私のとんでもない傲慢かもしれないが私自身おそれおのきつつ、反論を書いてみたい。

先ず、この問題が起こってきたその同じ時期にエズラ、ネヘミヤの研究が安息日学校教課で取り上げられたことに私は主の不思議な摂理のみ手を見る気がする。教課そのものはこの問題についてそれほどつっこみはしなかったものの、学び考える資料を十分提供してくれたことはありがたいことであった。

では私の本論に入ることにするが、前述した私なりに委員会の意向をまとめた線にそって論を進めてみたい。

基本理念に関わる！

① 委員会のガイドラインは「教会指針」等にしるされている基本理念や基本姿勢の変化を意図するものではなく、それを堅持すると繰り返し強調しているが、その資料（特に高橋、白石牧師の基調論文）を読むとSDA基本理念を否定する方向に導かれるように感ずる。（理由は後述する）だからある牧師たちからSDAの基本理念を強調した反論が出るのは当然だと思う。何か、基本理念をタテマエとしてかかげながらホンネとしては反対の考え方が交錯している矛盾を感じるのは、読みこみ過ぎの間違った受け取りかただろうか。

② そしてこのガイドラインは決して基本理念に抵触するものではなく、「あくまでもきわめて限定されたケース」にたいするものであるとこれ又再三再四強調されているが、牧師たちのアンケート結果にもはっきりあらわれているように、自分の大切な信徒たちのどのようなケースも認めてあげたいのが人情ではないだろうか。故にもしこのガイドラインが公認されたら、すべてのケースが例外として適応されて、歯止めがなくなってしまう、基本理念は形骸化してしまうのではないだろうか。

反論

③ ではここから具体的な反論に入ろう。

A. 申命記7：1～4等は「公然たる神の敵」との結婚の禁止だから、偶像礼拝者でなく、SDAに反対するた宗教の信者でもないどころか、よき理解者、有望な求道者をこの聖句で拒むのは正しくないとしているが、決して個人攻撃としてではなくて聖書と証の書が原則として警告していることをみていただきたい。

「イスラエルの教訓として申命記に示された原則は、神の民が終末に至るまで従わなければならぬものである。真の繁栄は、われわれが神との契約関係を持続することにあるのである。われわれは神を恐れない人々との同盟を結んで、原則を曲げることはできない。・・・最も恐るべきものは、神の働きに公然と反対する敵ではない。ユダとベニヤミンの敵のように、なめらかな言葉と美しい表現を用いて、いかにも神の民と友好的同盟を求めるとのよ
うに近づいてくる者たちが、もっと大きな欺瞞力をもっている。このような人々に対して、ひとりびとりは十分警戒して、注意深く隠された巧みなわなに、気づかずに捕らえられることのないようにしなければならない。特に今日、地上の歴史が終わろうとしている時に、主はご自分の民が、気をゆるめることなく警戒することを要求しておられる」 国と指導者下177。

このほか、証の書は多くのページをさいて警告を与えているので読んでいただきたい。
(国と指導者下176、259、245、221、275。

続いてソロモンの事について引照しよう：

「ソロモン王は多くの外国の女を愛した・・・主はかつてこれらの国民について、イスラエルの人々に言われた。『あなたがたは彼らと交わってはならない。彼らもまたあなたがたと交わってはならない。彼らは必ずあなたがたの心を転じて彼らの神々に従わせるからである』しかしソロモンは彼らを愛して離れなかった。」列王上11：1～3。

「ソロモンはイスラエルの南に位する強力な王国との関係を強化しようとして、禁じられた所に足を踏み入れた。・・・『ソロモン王は・・・パロの娘をめぐってダビデの町につれてきた』。(列王上3：1) この結婚は神の律法の教えには反していたけれども、人間的見地からすれば祝福になったように思われた。なぜならばソロモンの異教徒の妻は改心して、彼に加わって真の神の礼拝をしたからである。さらにパロはゲゼルを占領し、『その町に住んでいたカナン人を殺し、これをソロモンの妻である自分の娘に与えて婚姻の贈り物としたので』大いにイスラエルに貢献したのである(同9：16)。

ソロモンはこの町を再建した。こうして、彼の王国が地中海沿岸において、大いに強化されたことは明らかである。しかし、異教国と同盟を結び、偶像教徒の王女と結婚の契りを結んだことにより、ソロモンは神が神の民の純潔を保つためにお設けになった賢明な規定を、軽率にも無視したのである。彼のエジプト人の妻が改心するだろうという希望は、この罪に対しては誠に薄弱な口実でしかなかった。神はその慈悲深い恵みによってしばらくの間この恐ろしい過ちをご支配なさった。・・・しかし、ソロモンは彼の栄光と力との根源を見失い始めていた。

・・・彼は主のみこころを自分の方法で行おうとした。彼は周囲の国々と政治的、通商的同盟を結ぶことは、これらの国々に真の神の知識を伝えることであると判断した。・・・ソロモンは彼の知恵と模範の力が、彼の妻たちを偶像礼拝から真の神の礼拝に導き、こうして結ばれた同盟によって周囲の国々はイスラエルと親密になるだろうと、安易に考えていた。しかし、それはむなしい望みであった。ソロモンが自分は異教徒の影響に十分抵抗できると誤って判断したことは、致命的であった。また、自分は神の律法を無視したとしても、他の人々はその聖なる戒めを尊んで従うだろうという希望を彼に抱かせた欺瞞もまた、致命的なものであった。王の異教諸国との同盟と通商関係は、彼に名声と誉とこの世の富をもたらした。・・・しかし、品性の精金はその色があせ損われた。・・・彼は光と

闇、善と悪、純潔と不純、キリストとベリアルとを一致させようと試みたが、彼は何と大きな価を払ったことであろう。・・・他の国々との通商によって、彼らは神を愛さない人々と密接に交わるようになり、彼ら自身の神に対する愛も大いに低下した。高く聖なる神のご品性についての、彼らの鋭敏な感覚も麻痺した。・・・偶像礼拝者との結婚は一般の習慣となり、イスラエルの人々は、急速に偶像礼拝に対する嫌悪感を失っていった。・・・キリスト者は独自の立場を保ち、世俗とその精神と、その影響とから離れていなければならない。・・・ソロモンは驚くべき知恵を与えられたが、世が彼を神から引き離した。今日の人々も彼より強くはない。彼らもソロモンを陥れた影響に負けやすいのである。神がソロモンに危険の警告をお与えになったのと同じように、今日も世と親しんで、魂を危険に陥れないように神の民に警告を発しておられるのである。『彼らの間から出ていき、彼らと分離せよ・・・汚れたものに触れてはならない。触れなければわたしはあなたがたを受け入れよう。そしてわたしは、あなたがたの父となり、あなたがたはわたしのむすこ、むすめとなるであろう。全能の主がこう言われる』と神は訴えておられる」（国と指導者上28～34）

B. コリントII6:14は直接的には結婚の問題ではない、多くの聖書学者も(う)そう言っているというくだりを読むと深い神学を勉強していない私は愕然（がくぜん）とすると同時に、そのような神学を勉強しなかったことを感謝する。そう言えば、私も一度、ある有名な旧約学者の講義を聞いたことがある。クラスの終わりに一人の受講生が質問した、「先生、それではアブラハムは実在の人物だったんですか？」旧約学者曰く：「難しい質問ですなー！」

確かに学問的に突っ込めばいろいろ問題も出てくるかも知れない。パウロの表現にも「これを言うのは、主ではなく、わたしである」とか「主の命令を受けてはいないが・・・意見を述べよう」等とあると戸惑いを感じる。しかし、聖書全体の主張を静かに瞑想しながら証の書を開くと：

「未信者と結合することはサタンの側に身をおくことです」「クリスチャンが神を敬わない者と結婚することは聖書に禁じられています。主は『不信者となりあわななくびきを共にするな』と命じておられます」（青年への使命・・・444、466）。

とあれば、もう十分で、あとは「O. K」のサインをなんとか引出そうとするのではなく、「NO」のサインの中に神の愛を追い求め、導きを真剣に探し求め、門をたたき続けるべきではないだろうか。

(慾)に目がくらんだバラムの経験は教えている。

「バラムは、神のみ旨を行うことを求めず、かえって自分の道を選び、主の承認をえようと努めたのである。今日も、同様のことをする者が数多くいる。彼らは、自分たちの傾向と一致しているならば、どんな義務も困難なく理解す。・・・しかしこうした証拠が彼らの欲望と傾向に反するものであるため、彼らは、しばしば、それをないがしろにして、神のみ前に出て、自分の義務をしろとうとする・・・『それゆえ、わたしは彼らをそのかたくなな心にまかせた』（詩81：12）。義務をはつきり示されたとき、それを実行しなくてもよいという許しを受けるために、神に祈ろうなどと思ってはならない。かえって謙虚なへりくだった心をもって、その要求を履行するために、神の力と知恵を求めるべきである」（人類のあけぼの下47～48）。

C. **証の書**はSDA信仰に反対する者との結婚のみを否定しているという委員会の解釈は、これこそジョージ・ナイトが言っている「預言の霊の不適確な解釈」であり「預言の霊が人々を聖書に導くよりは聖書から引き離すような使い方をされている」ケースだと私は感じる。そして彼が言うようにE. G. ホワイトの見解が聖書に調和するものであ」って未信者との結婚は容認されないと私は理解する。

D. **教会指針**は事情や状況によって改定される可能性があることは私も認める。そして1994年1月号のアドベンチスト・ライフによると「・・・賛成しない」「司式すべきでない」というきつい表現が「思い止るように強く求め」「司式しないように強く勧告する」という、やややわらかい表現に変ったが、それでも「NO」であることに変わりはない。

E. 結婚が**サクラメント**ではないという理論には敢えて反対しなくても、「信仰の大要」にあるように結婚は、エデンにおいて神によって制定され、イエスによって、愛の交わりによる生涯にわたる男女の結合として認められた。クリスチャンにとって、結婚の契約は伴侶に対するものであると同時に神に対するものであって、信仰を同じくする者の間にのみなされるべきものである」（121）とあるので、それで十分である。

F. 委員会の主張によれば、「**日本の実情の分析**」が強調されているので私もそれを踏まえて述べよう。

確かに多くの日本人は反キリスト教ではないかもしれない。しかし、「反対しない者は、あなたがたの味方」（ルカ9：50）の聖句をここに持ってくるのはおかしい。このみ言葉の意味は「人がわれわれ自身の理想や意見に全面的に一致しないからといって

その人が神のために働くことを禁じることは正当ではない」（各時代の希望Ⅱ 216）ということであって、反キリストを唱えないから味方だとするのはあまりにも短絡的過ぎる。

今日の日本人の偶像は何だろうか。

「神と富とにかね仕えることはできない」（マタイ 6：24）

「富と権力、安逸と放縦が最高の幸福として求められた」（教育 74）

「永遠ということを考えに入れしないで、ただ現在のためだけに生きた」（同）

「天から与えられた真理の標準を受け入れしないで、人間の考えだした標準を受け入れていた」（同 73）

「教育制度においては、人間の哲学が、神の啓示に代わっていた」（同）

「無関心、矛盾、生ぬるさ、裏切り」（国と指導者下 245）

「不信仰と物質主義」（教育 74）

「神の礼拝は・・・人間を崇拜することにとりかえられた」（同）

これらは、キリスト初臨の時のユダヤの実情であるが、そのままキリスト再臨直前の日本の実情でもある。このような中で神の子らが正しい信仰をもって神を証しすることは容易なことではない。

このような偶像崇拜、人間崇拜に陥らずに、神に栄光を帰するために結婚問題も考えねばなるまい。

G. **教会内の男女比が**：2であることは心の痛む現実である。もっと我々は男性をひきつける伝道方法を考えなければいけないと思うが、主は「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである」（ヨハネ 15：16）と言われた。故に、主に召されたこれらの尊い女性たちを主のみ旨に沿って用いることをまず第一に考えてみようではないか。

「この危機の時代に婦人たちは働きにたずさわることができ、又主は彼らを通して働かれる。・・・救い主はこうした自己犠牲的な婦人たちの上にご自分のみ顔の光を輝かせてくださる。そのために彼らは男の力にまさる力を与えられる。彼らは男のできない働き、心の生活にふれる働きを各家族の中ですることができる。彼らは男たちが動かすことのできない人々の心にふれることができる。彼らの働きが必要である。」（クリスチャンの奉仕 31）

このように主のみ顔の光を反映しているクリスチャン女性たちは、さらに美しさを増し、み旨のままに もっと多くの男性たちをひきつけることにもなるかもしれない。マタイ 12：7の聖句がそこに引用されているが、私は消極的な「あわれみ」をもって彼女等に同情し妥協するよりは積極的な「あわれみ」によって彼女等を励まし、主の側に固く立つようにさせてあげたい。

H. 前記の**アンケート**は考えるべき問題点を提供しているので真剣に検討しなければいけないと思う。しかし同時に気をつけねばならないことは統計に現れた現実、現実には違いないが、それをベースにして働きの方向を決めてはいけない場合があるということである。

すなわち、教会の中で一番安定しているのが未信者と結婚している信者という統計がでたとしても、そのようは傾向を助長してはいけないことには反論はないであろう。しかし、そのような統計の提示の仕方によっては、暗黙のうちにそれを助長することになりかねないのである。委員会で提供したこれらの資料を

ずっと読んでいくと、少なくとも私はそう感じたのである。

統計というものは、必ずしも我々を正しい判断に導くとは限らない。多数決も正しい時と正しくない時がある。エリコを探った12人の斥候や、ギデオンの300人の精鋭の物語は我々にそのことを教えている。

「神のために忠実に働いたネヘミヤにとってこのやむを得ぬ厳格さがどれだけ彼の心を痛めたか」
(国と指導者下274)

とあるが、確かに愛する信徒たちの事を思うと心の痛むことである。

しかし、「人々が健全な教えに耐えられなくなり、耳ざわりのよい話・・・作り話の方にそれていく時が来」(テモテⅡ4:3~4)でも「健全な教えによって人をさと」(テトス1:9)さなければいけないと思うし、「人に喜ばれようとしているのか、それとも神に喜ばれようとしているのか」(ガラテヤ1:10)を問い続けなければいけないと思う。キリストを心から愛し、キリストの為なら獄にでも、死でもと本気で思っていたペテロに対して主は「サタンよ、引き下がれ。わたしの邪魔をする者だ。あんたは神のことを思わないで、人のことを思っている」(マタイ16:23)と厳しい警告をお与えになったが、心の中にはペテロに対する愛と感謝が燃えていたにちがいない。

この問題の取り扱い、決してパリサイ的な冷たい議論の応報によってではなく、「常にキリストの精神をあらわすべきであることを忘れ」(同275)てはならないと思う。もし私の言葉が必要以上にきびしかったり、冷たかったりしたら心からお詫びしたい。ただ私の主張は、私が聖書と証の書を学んだ限りでは委員会のガイドラインは非常に危険な方向にあるということである。先輩諸兄姉の反省を促してやまない。乞うご批判。■

(教団理事 津嘉山繁)

品性の完成と後の雨 再臨と不死への準備

2T505 「神の実在を日毎に経験し、日毎に自己を否定し、喜んで十字架を負い、キリストに従わない限り、誰も生きたクリスチャンとは言えない。生きたクリスチャンはみな日毎に清い生活を送る。完全を目指して前進するとき、彼は日毎に神への悔い改めを経験する。この悔い改めは完全なクリスチャンの品性を獲得するときまで、すなわち不死の仕上に対する完全な備えができるときまで完成することがない。



牧師への証506 「露と雨がまず種を発芽させ、次に作物を実らせるために与えられるように、聖霊は霊的成長の過程を一つの段階から次の段階へと進めるために与えられる。穀物の実が熟すことは、魂における神の恵みの働きが完成することを示している。聖霊の力によって、神の道徳的なかたちが品性において完成される。私たちは全的に変えられてキリストに似る者となるべきである。

地上の収穫物を実らせる後の雨は、教会を人の子の来臨に備えさせる霊的恵みを表している。しかし、前の雨が降らない限り、生命はない。緑の葉は出ない。先の雨がその働きを成し遂げなければ、後の雨は種を完全にすることはできない。



なぜユダヤ人はイエスを
メシヤとして拒んだか？

フレデリック・C・ギルバート

F・C・Gilbert (ギルバート) は、ユダヤ人で、セブンスデー・アドベンチストに改宗してユダヤ人のための働きのパイオニアになった。我々が教会学校の認可問題で激しい論争があった頃にこの記事が出た。1933年12月 Ministry.

4 T 2 7 - 「我々の歴史と古代イスラエルの歴史との間には著しい類似点がある」

1 SM 4 0 6 - 「キリストの初臨の前のイスラエルの子らの試みと彼らの態度は、キリスト再臨前の神の民の歴史と立場を例証することをわたしは幾度も幾度も示された」

なぜ、ユダヤ人は、旧約聖書にイエスがこの世に来临なさることに関する預言、型が多くあるのにイエスをメシヤとして認めることに失敗したのだろうか？特にサンヒドリン（最高議会）が彼を歓呼して迎える

ことを拒絶したのは理解に苦しむ。なぜなら、人々がもしその事を知っていたなら、栄光の主を十字架につけることはしなかったであろうと使徒たちが繰り返して言っていたのである。主の生命を犠牲にしたのは、無知がさせたことであつた。ある人々にとっては、パリサイ人らはモーセの座に座っている指導者として認められていたから、彼らによってイエスが拒絶されたということは、全く理解しがたいことである。

聖書は、ユダヤ人は正直で、熱心で、誠実な人々として描いている。パウロは、「わたしは彼らが神に対しては熱心であることはあかしするが、その熱心さは知識によるものではない」（ローマ10：2）と言っている。救い主を受け入れる前の彼自身の訓練と教育について「わたしはまた、神に対して、また人に対して良心に責められることのないように、常に努めています」と付け加えている。

「わたしは、自分を強くして下さったわたしたちの主キリスト・イエスに感謝する。主はわたしを忠実な者として見て、この務に任じて下さったのである。わたしは以前には、神をそしめる者、迫害する者、不遜な者であつた。しかしわたしは、これらの事を、信仰がなかったとき、無知なためにしたのだから、あわれみをこうむつたのである」Iテモテ1:12,13.

70年のバビロンの捕囚を経て、アブラハムの子孫が味わった苦い経験のために、バビロン追放から救われて後、指導者たちは神の言葉を決して拒まないで決心していた。影響力のあるイスラエルの人々はもし真の神から再び離れるならば、危険が訪れることを恐れた。エズラの次の言葉は、それをよく表している：

「われわれは再びあなたの命令を破つて、これらの憎むべきわざを行う民と縁を結んでよいでしょうか。あなたはわれわれを怒つて、ついに滅ぼし尽し、残る者も、のがれる者もないようにされるのではないのでしょうか」エズラ記9:14

キリストの生まれる約2世紀前に書かれた「父祖の倫理」というユダヤ人の論文に「判断に慎重であれ、多くの弟子を訓練せよ、律法にさくを作れ」とある。イスラエルの知者たちは律法に垣根を張りめぐらすために最大の努力をした。注解、説明、論文、タルグム（旧約聖書の〔一部の〕アラム語訳）、その他の宗教書の助けを増し加え、人々が神のみ言葉の教えをよりよく理解できるようにした。しかし残念なことは、神に従うために聖書に含まれている要求をよく人々が知るようと努力することが彼らにとって大きなつまずきの石となつてしまった。

ユダヤ人の歴史家ヨセフスによると次のようなことが起つたという。アレキサンダー大王は大祭司ヤドゥアの歓迎を受けて後、エルサレム神殿で礼拝した。その後ギリシャ人とユダヤ人の間に友好精神が芽生えた。アレキサンダーの將軍たちは彼らの大將がスコパス山で大祭司にあつた時、彼を殺さないでどうして彼を抱擁したのか理解に苦しんだ。アレキサンダーは、マケドニヤにいたとき、幻を見せられたので、神殿に入ってヤドゥアの神を礼拝したいことを彼の部下に話していた。

ギリシャはユダヤ人に彼らの友となり、恩恵を施すことを望んでいると保証を与えた。彼らはヘブルの神についてもっと学びたいと望んでいた。そのように協定が結ばれて多くのラビたちがエルサレムからアレキサンドリヤに行き、ユダヤ人の聖書がギリシャ語に翻訳された。ギリシャの学者、知者たちは自分たちの文化と進歩の価値を高めるために可能な限りにおいて、あらゆる情報路を求めた。またギリシャ人はユダヤの才能ある年たちをアレキサンドリアに送らせ、哲学、科学、ギリシャの学問の訓練と教えを受けさせようと提案した。

多くのイスラエルの長老たちは、このような行動の結果を恐れていた。賢人たちは彼らの祖先が異教の方法や習慣と接して、どんなに悲しい結果になったかを覚えていた。彼らは若者たちにこのような手順をとらないように勧告した。しかし若い者たちは、かえって反論した。強い、思慮深い、活発な青年たちがギリシャの学校に入って、ギリシャの識者、知者たちに影響を与え、ユダヤの宗教の価値と美しさを見せ、そうすることによってギリシャの識者たちの幾人かの者にユダヤ教を受け入れさせることになるだろうと言った。しかし、イスラエルの年長者たちはそれに反対した。彼らは青年たちが異教の学問と接触することがユダヤ民族の将来に腐敗をもたらすのを助長するのだとの意見を保持した。

ギリシャ人はユダヤ人の長老たちに自分たちの宗教の標準を保持できることを約束した。彼らは子供たちが教えられていたシナゴグ（ユダヤ人教会であり、教会学校でもある）はそのまま続けさせ彼らの宗教は妨げない、また、ベス・ハメドロシ（ユダヤ人子弟の高校）では青年たちが準備を受け続けることができるし、しかも、タルムード（ユダヤの上級学校、大学）では律法の教師たちがギリシャの知恵と学問を学ぶことによって、世界一の国家から認められることになる。ユダヤの学校の卒業生は大いに有利な立場に置かれるであろうということを信じるように勧められた。

多くのイスラエルの影響力をもつ人たちが、ギリシャの圧力に屈した。彼らは青年たちが宗教に忠実であるように神が助けてくださるし、ユダヤ人社会の訓練学校は、諸国家の目によりよく映るであろうと言った。彼らが到達すべき目標の動機をしっかりと持つことによりイスラエルの人々は、その学者らが限りない有利な立場に置かれることになるだろうと思う様になった。青年たちが知識、影響力、名声を得、学問に進めば進ほど高いところに到達するであろうと思うようになった。

ユダヤの学校は徐々にその卒業生に称号を授与することになった。その中には、ラビ、タナゲイヨン、サーディー、ラボンなどの称号があった。ラビの学校の卒業生は異なった衣を着ることによって、その差異を表す必要があると思うようになった。称号を持っている人は特殊な目立つガウンやキャップを着用しなければならなかった。少しずつ教育的貴族社会が形成され、サンヒドリンと呼ばれるものが出来上がった。この言葉はギリシャ語から来ており、ヘブル語では BETH DIN HA-GO-DOL（ベス・ディン・ハゴドール＝大判議事会）という名前であった。

● 霊性の衰微

宗教学校の運営が続いている一方、霊的感化と力の衰微が目に見えて顕著になってきた。年々神の言葉の学びは少なくなり、文化、哲学にもとづく学科が増えていった。ラビの学校のカリキュラムは知性偏重の方向へと変っていった。年がたつにつれ、人間が高められ、神の事はだんだん考えられなくなった。ラビは高められ、無学な者は卑しめられた。敬神の念は徐々に消え、形式と儀式が増えていった。ラビ主義と学校の規則を助長する種々の律法が作られる一方では神を愛し、従うように奨励された。「父祖時代の倫理」からラビたちは教えた：「5才の子供は聖書を学び、10才にはミシュナを、15才にはゲマラを勉強すべし」と。

ミシュナは聖書の注解書で、冊数の多い部厚いものであり、ゲマラはミシュナの注解書であった。だから生徒が進級するにつれ、知性の鋭さが発達するにつれ、神の言葉は学ばれなくなり、人間の書物がもっと学ばれるようになった。

● 知性偏重主義は靈感を無効にする

ユダヤ人の集会で受け入れられるためには、ラビの学校で課程を終了しなければならなかった。大サンヒドリン（本部ベス・ディン・ハゴドルがエルサレムにあって、パレスチナ地方に支部の小サンヒドリンがあった）で計画され、その手順に従うことに失敗した者は、大衆から受け入れられなかった。アブラハムの子らによって受け入れられるためにはラビ風の資格をもっていることが絶対に重要なことであった。

イスラエルの地にヨハネとイエスが現れた時には、ユダヤの地はこのような状況になっていたのであった。次の各時代の希望の描写はまことに適切である：

「イスラエル人は、バビロンに捕われの身となったことによって、刻んだ像の礼拝が効果的になった。その後何百年もの間、彼ら異教の敵の圧迫に苦しんだために、自分たちの繁栄は神の律法に従うことにかかっていることを確信するようになった。……バビロンから帰ってからは、宗教的な教えに十分な注意が払われた。全国に会堂が建てられ、そこで祭司や律法学者たちが律法を講義した。また学校が設立され、そこ、文学や科学とともに、義の原則を教えるところといわれた。だがこうした会堂も学校も墮落したものとなった。……多くの事において彼らは偶像礼拝者たちの習慣に従った。

ユダヤ人は、神から離れるにしたがって、儀式的な行事に教えられている意味を大部分見失った。……所がユダヤ人はその儀式から霊的生命を失い、その空しい形式を固守した。……祭司たちとラビたちは、彼らの失っていたものを補うために彼ら自身の要求を増し加えた。こうして要求が厳格になればなるほど、神の愛のあらわれがますます見られなくなった。彼らは儀式の数が多ければ多いほど、それだけ清い者になれると思っていたが、その心は高慢と偽善に満たされていた」I各時代の希望16、17。

「ユダヤ人が神から離れた時、信仰は暗くなり、望みの光りはほとんど前途を照さなくなってしまう。預言者たちのことばは理解されなかった」I各時代の希望23。

バプテスマのヨハネとイエスはラビ風の学校の出身でなかったので、人々は彼らを教師として認めなかった。しかし、神は彼らに天来の力とみ霊によってメッセージを与えられたのである。

イスラエルの指導者がヨハネの使命を神からのものとして受け損じたので、彼らは救い主がその生涯と来臨について聖書にもとずいていることを確かにしたが、その使命を受け入れる備えができていかなかった。

ラビたちは「この人は学問をしたこともないのに、どうして律法の知識をもっているのだろう」（ヨハネ7：15）と議論した。

イエスの家族はシナゴグ（教会）に忠実であったから、彼の兄弟たちはメシヤとして信じなかった（ヨハネ7：45）。学問の標準はサンヒドリンによって確立されていた。そしてラビの教えを受け入れることを拒んだ者は誰でも認められなかった。ゆえに神のみ言葉の保管者であった人々に救い主が来られた時、人々はモーセや預言者によって語られている型と預言の成就として彼を認め得なかった。その理由を理解するのはむずかしいことではない。

人間の哲学と神の言葉を混ぜることによって、霊的な命と力が教師や信者の生活に欠けていた。彼らは長いきな洞察力を持っていなかった。アレキサンドリヤ、アテネの文化は、イスラエルの家の霊的力を弱

らせてしまった。世的な宗教訓練が「自分の民の所にやってきた」のに、すべての階級の人々をして主に会う備えにふさわしくないものにしていた。「自分の民は彼を受け入れなかった」。彼の主張は天来のものであり、人々はこの世的であった。天とこの世は調和しなかった。

そのお働きの初めに、イエスは、群衆は彼を殺すであろうと言われた。パリサイ人らは、サマリヤ人と一緒にいたとか、悪霊につかれているとかでイエスを非難した。罪によって盲目にされ、人間の学問、ラビ風の伝統によって影響され、麻痺された大衆は靈的直感に欠けていた。最後に彼らは彼らの唯一の望み、救助の源を拒んでしまった。どんな彼らの正直、熱心、まじめさも彼らを罪から救うことはできない。世の光⁽¹⁾人の救い主であられるイエスだけが救い出すことができるのである。

ギリシャの文化や学問の要求を相当受け入れることによって、イスラエルの指導者たちは名声と影響力を得ようと望んでいた。彼らは彼らの敬神深い先祖からゆずられた標準に辛抱強くしがみつくとよりは、世の教育の標準に同化することによって有利となるだろうと信じるように導かれていった。このようにしてユダヤ人は彼らの影響力を多く失い、彼らの名声を維持することに失敗し、永年待ち続けたメシヤを拒んでしまったのであった。 ■

ラオデキヤに大変化が起る

これを求めよう！切に求めよう！

天使は「聞きなさい」と言った。やがて、わたしは、多くの楽器が、完全に調和して、音楽をかなでているのを聞いた。それは、わたしがこれまでに聞いたこともない美しい音楽で、恵みとあわれみに満ち、高尚で聖なる喜びにあふれていた。それは、わたしの全身を感動に震わせた。天使は「見なさい」と言った。すると、わたしは前に大いに震われるのを見たその一団の人々に注目した。私は、前に涙を流し、苦悶しているのを見たその人々を見せられた。彼らの回りの守護の天使は2倍に増やされた。そして人々は、頭から足まで武具をまとっていた。彼らは、兵卒の隊のように、規律正しく動いた。彼らの顔は、彼らの耐えてきた激しい争闘と経てきた苦悶とを表していた。しかし、彼らの容貌は、激しい内的苦悶のあとがあったとはいえ、今は、天の光⁽¹⁾と栄光に輝いていた。彼らは、勝利を得た。そして、彼らは、深い感謝にあふれ、聖なる喜びに満たされていたのである。

この一団の数は減少していたある者は、ふるい落とされて、途中に残された。勝利と救いを尊んでそのため忍耐強く嘆願した人々に加わらなかった不注意で無関心な人々は、それにあずからず、暗黒のうちに取残された。そして、彼らの場所は、真理を信じてた隊列に加わる人々によって、直ちに補充された。悪天使たちは、なお彼らの回りにつめ寄せたが彼らに打ち勝つ力はなかった。

わたしは、武具をまとった人々が力強く真理を語るのを聞いた。それは効果的であった。多くの人々が縛られていた。夫に縛られていた妻もあれば、親に縛られていた子供もあった。真理を聞くことを妨害されていた心の正しい人々は、今、熱心に真理を自分たちのものにした。親族を恐れる気持ちは全くなかった。そして、真理だけが彼らの前で高められたのである。彼らは、飢え渇くように真理を求めていた。真理は、生命よりも愛すべく尊いものであった。わたしは、何がこのような大変化をもたらしたのかをたずねた。

「それは後の雨、主のみ前からの慰め、第三天使の大いなる叫びである」と天使は言った。

ダニエル 11:40～ 「終わりの時」の預言



ダニエル 11:40～からの預言は「終わりの時」に世界に何が起るかという興味深い研究であるが、焦点は、最後の神の民に何が起るかということである。最も関心を寄せなければならない研究箇所である。今回は 41 節を学んでみたい。

ダニエル書 11:41 「彼（北の王）はまた麗しい国にはいります。また彼によって、多くの者が滅ぼされます。しかし、エドム、モアブ、アンモンびとらのうちのおもな者は、彼（北の王）の手から救われましょう」

昔、北の王が南の国、エジプトに遠征に出かけたときには、いつも「麗しい国」パレスチナを通らなければならなかった。旧約時代、神の民はイスラエルであった。彼らの最大の敵は、「北の王」であり、アッスリヤも、バビロンも、ペルシャも、ギリシャも北の王と呼ばれた。例えばエレミヤが「北からの災い」の切迫を神の民に警告したとき、バビロンのことを指していた（1:13、14、15；4:6；6:1、22；10:22...）。南には、エジプトがあり、北と南の戦いの間に挟まって、神の民はいつも悩まされていた。

●終わりの時代の北の王は＝ローマ法王教＝パチカン、南の王は：無神論権力＝共産主義、心霊術、ヒューマニズム（人道主義）、ニューエイジ運動...であることは前に指摘した。

●「麗しい国」とは？ 8:9、11:16 新共同訳「あの『麗しい地』」

「その時主は自分の地のために、ねたみを起し、その民をあわれまれた。... シオンの子らよ、あなたがたの神、主によって喜び樂しめ。主はあなたがたを義とするために秋の雨を賜い、またあなたがたのために豊かに雨を降らせ、前のように、秋の雨と春の雨とを降らせられる。」ヨエル書 2:18, 23。この預言の言葉は、初代教会に成就した。ペンテコステの聖霊降下である。「ご自分の地」とは、新約時代においては、ご自分の教会の事である。その事は、使徒行伝 2、3 章を見ると分かる。それが初代教会の事と解するなら、ダニエル 11 章の「麗しい国」は、新約時代には初代教会、宗教改革時代には、プロテスタント、「終わりの時」になっては、セブンスデー・アドベンチストであることは誰が否定することができるだろうか？

「終わりの時」の「美しい国」を中東－パレスチナとするのは全く利にかなわない。先日まじめなモルモン教徒が私の家に来た。彼は私にコンピュータのことを話しながら、しきりに最後の時代に中東パレスチナにおいて、イスラエルは全世界の諸国から攻められ、ハルマゲドンとなる。その時エホバの神が介入なさると話していた。また、ローマ法王教がその座をパレスチナに移すと信じている人も少なくはない。SDAの地質学者のジョージ・マックレーデー・プライスが「美しい国」のことを「おそらくプロテスタント全体を意味するのであろう」と言ったとき、真理に近い理解をしていたと言える。しかし、少し外れていた。1844年以来、いわゆるプロテスタントは、背教したプロテスタントで「バビロンと呼ばれているのであって（黙14：8）、「美しい国」ではない。

再臨運動がプロテスタント宗教改革の後継者なのである。ゆえに終わりの時代の「美しい国」とは世界の再臨運動の民を包含するセブンスデー・アドベンチストである。

●「美しい国にはいる」

「終わりの時」になって、「北の王」＝ローマ法王教が、「南の王」＝エジプト＝無神論勢力を制覇し、また「国々に入って行って、みなぎりあふれ、通り過ぎる」＝あらゆる国々の政治界、経済界、宗教界に入るばかりでなく、「美しい国」にも入るとある。とすると、セブンスデー・アドベンチストにも入るといふことなのだろうか？

イエズス会

霊感の書から、ローマ・カトリックの「全闘志中、最も残酷で無法で、強力なイエズス会」の侵入策略について引用してみよう：

「さまざまな偽装のもとに、イエズス会の会員たちは、国政にまで手を伸ばし、国王の顧問の地位について、国家の政策をまとめた。また、人々の様子を探るために、その僕となった」大上294。

「この教会は、何が起こるかを読み取ることができる。．．．歴史は、教会がたくみに根気よく国事に入り込む努力を続け、一度足場を得てしまうと、王侯や人民を破滅させてでも教会自身の目的を進めることを証明している。．．．ローマ教会は決して変わらないということがこの教会の自慢の種であることを忘れてはならない。．．．

ローマ教会は黙々としてその勢力を伸ばしつつある。その教えは議会に、教会に、また人々の心に影響を及ぼしている。．．．自分が手を下す時が来たら自分自身の目的を押し進めるために、教会は、ひそかに、そして怪しまれないように、勢力を伸ばしつつある。この教会が何よりも望むものは、有利な立場である」大下339～341。

★ イエズス会の方法（手段）：

1. キリストの福音に偽装する。

「キリストの福音は、その信者たちに、危険を冒し、苦難に耐え、寒さ、飢え、苦勞、貧困にもめげず、真理の旗を掲げ、拷問も投獄も恐れない力を与えてきた。この勢力に対抗するために、イエズス会は、その会員を狂信的にさせ、同様の危険に耐えるように、またあらゆる欺瞞の武器を持って真理の力に対抗するようにさせた。．．．彼らは、一生の間貧困と質素な生活を送ることを誓った。．．．彼らは、会員として活動するときは聖衣をまとい、牢獄や病院を訪ねて病人や貧者に奉仕し、世俗を捨てたことを公言し、良い働きをしながら巡回されたイエスの清い名を帯びていた。

2. 極悪非道なやり方

「しかし、この潔白な外観のかげに、しばしば、極悪非道な目的が隠されていた。．．．虚偽、盗み、偽証、暗殺などは、教会のために役立つならば許されるだけでなく、賞賛すべきものであった」

★ ローマのねらいは何であろうか？

「この教会は、再び世界を支配するために、また迫害を復活させるために、またプロテスタントが行ったすべてのことを無効にするために、激しい決定的な戦いの準備として、その感化力を広げ、その勢力を強めようと、あらゆる手段を用いている。カトリック教会はいたるところに地歩を占めつつある」大上321～322。

「その目的とするところは、富と権力の獲得であり、プロテスタント主義をくつがえし、法王至上権を復興することであった」大下294。「失われた至上権を回復することをねらっているのである」大下340。

まとめてみよう：

1. 世界を支配すること。

2. プロテスタント主義をくつがえすこと。

プロテスタントが行ったすべてのことを無効にすること。プロテスタントの主義は何であろうか？信仰の自由、個性の回復である。誓書のみが信仰と行為の基準であるということである。プロテスタント諸教会は「大いなる暗黒にある」大下321、「ひどく墮落してしまった」大下329、のである。もはや一般キリスト教界はカトリックにプロテスト（抗議）するどころか、合意に傾いているのである。

今日、プロテスタント主義はどこに受け継がれたであろうか？言うまでもなく、最後の真の教会のSDAであるはずである。とすると、ローマ教会のターゲットはどこであろうか？

3. 迫害を復活すること。

第7日目安息日を守るものたち、イエスの証を持っているものたちがターゲットである。

4. 富と権力を獲得すること。

全世界の政治経済を支配することをねらっている。(ダニエル11:43; 黙18:3~)

- イエズス会は、我が教会にもすでに侵入しているかどうかは、読者の判断に任せる。少なくとも、「嵐がやってくる時」「最後のテスト」日曜休業令の時には、目に見えて猛攻撃がなされる。そして多くのものが滅ぼされるというのである。それが、聖書の確かな預言だとすれば、我々は「つむじ風」＝「猛烈な嵐が容赦なくやってくる」(8T315) その時に備えて、何をすればいいのか、真剣に預言の研究と、心の備えに目を覚まさなければならぬのではないだろうか？

● 「多くの者が滅ぼされる」

教会の多くの者が滅ぼされるのは、いつのことであろうか？ どのように北の王は多くの者を滅ぼすのであろうか？

その解答を見出す前に、もう一つの提案をしたい。我々は、ローマ法王教が全世界を支配するためにまた復活することを知っている。しかし、覚えていなければならないのは、それは徐々になされるプロセスであることだ。次第に影響力を増して、法王教の原則が癌の如く広がるのである。「人目に気付かれずに」「こっそりと」「ひそかに」「怪しまれないように」「静かに」「黙々として」「徐々に」なされるのである。そして「自分の時がきたら手を下す」のである。収穫の時がきて手を下す前に「不法の秘密の力」は着実に種まきをするのである。預言の霊は時にかなった警告を発している：

「わたしはパウロがテサロニケの教会に送った警告と奨励を我々の兄弟姉妹たちに繰り返すように指示された。『不法の秘密の力が、すでに働いているのである。ただそれは、いま阻止している者が取り除かれる時までのことである。．．．そこで神は、彼らが偽りを信じるように、迷わす力を送り、こうして、真理を信じないで不義を喜んでいたすべての人を、さばくのである』Ⅱテサロニケ 2:7~12 3T226

(教会への証8-226)。

我々は、ダニエル11章を研究するときに、預言の霊が過去の歴史が繰り返されると警告していることを、我々は良く覚えておく必要がある。(牧師への勧告113~116)。

11章の30、31節を振り返って考えてみよう。ここでは、北の王が初代教会を攻撃し、多くのものを打ち倒すのに成功していることを描いている。初代教会に徐々に異

教、あるいは世俗が侵入し、ついに「聖なる契約に対して憤り、事を行う」ようになった。つまり、「聖なる契約」とは、花婿なるキリストと花嫁なるご自分の教会の契りの事を言う。それを破り、キリストの教会は世と、政権と結合するのである。

「今や教会は恐るべき危機に陥った。これと比べるならば、牢獄や拷問、火や剣は祝福であった。キリスト者のある者たちは堅くたって、妥協することができないと宣言した。しかし、ある者たちは、彼らの信仰の幾つかの特徴を捨てたり、変更したりすることに、そしてキリスト教を部分的に受け入れていた者たちと結合することに賛成して、これは、彼らを完全な改宗に導く手段になるであろうと言った」大上35。

多くの信者が妥協した。聖なる契約に忠実に立ったものは小数であった。コンスタンチン帝の日曜休業令が発布されるまでに多くのキリスト信者はすでに、「世俗と結合し、その精神を抱くことによって、ほとんど同じ味方で物事を見るようになって」（大下378）いたのである。目には見えない分離がなされていたのである。日曜休業令が出されたときには、目に見える分離がなされた。

最後の時代の全世界的な日曜休業令が発布されるときにも、同じ様なことが我が教会に起こるのであろう。セブンスデー・アドベンチスト教会が同じ様な危機に直面している兆が見えてきている。神が再臨運動を導かれ、世界的に成長して祝福されていることは確かである。しかし、昔のイスラエルのようにサタンがどれほど真理を曲解させ信者の霊性を弱めているかに気づかなければならない。

真理はしばしばびっくりさせるようなことをする。またどんな人間にも、権威にもへつらうようなことをしない。多くの信者は、最後の真の教会は難攻不落であると考えるように教育されてきている。確かに最後の教会は難攻不落になる。しかしそれは、11章の45節に言われていることであらう。41節ではない。11:41節だけが、ダニエル、黙示録中で、最後の大きいなるテストで教会に大きいなる震いがあると特別に言及している。我々セブンスデー・アドベンチスト（第7日目安息日遵守者）は、黙示録13章に書いてある日曜休業令のテストで大いに震われることを理解することは難しいことではないはずである。預言者E. G. ホワイトの言葉を引用しよう：

「安息日は、特に論争点となっている真理であるから、忠誠の大試金石となる。最後の試練（テスト）が人々を襲うとき、神に仕える者と、神に仕えない者の区別が明らかになる」

大下375。

「各々の魂にテストがやってくる時はそんなに遠くはない。獣の刻印が、我々に強制されるであろう。世の要求に一步一步ゆだね、世の習慣と妥協してきた者は、ののしり、投獄の脅かし、死にゆだねるよりは権力にゆだねる方が、難しいことではないことを知るであろう。

「戦いは神の戒めか人間の法律かである。その時、教会の中では金とくずとが分けられる。真の経験とそのまねやメッキとがはっきり区別される。我々がその光輝を賞賛した多くの星がその時暗闇に消え去る」5T81。

「まもなく、神の民は激しい試練で試されるであろう。今本物で真実のようにみえる者たちの大部分の者が単なる偽物の金属であることが証明されるであろう。反対や脅迫や虐待によって力づけられるのではなく、彼らは臆病にも反対者の側を選ぶようになるであろう。．．．．大部分の者が我々を捨てる時、真理と義の擁護のために立つか、チャンピオンがわずかである時、主の戦いのために立ち上がるか—これが我々のテストである」

5 T 1 3 6

「嵐が迫ってくるとき、第三天使の使命を信じると公言していながら、真理に従うことによって清められていなかった多くの者（大部分の者）が、その信仰（立場）を捨てて反対の側に加わる。彼らは、世俗と結合し、その精神を抱くことによって、ほとんど同じ見方で物事を見るようになっている。そして、試練が来ると、彼らはすぐに、安易で一般受けのする側を選ぶのである（選ぶように準備されているのである〔原文〕）。かつては真理を喜んだところの、才能ある雄弁な人々は、その力を用いて他の人々を欺き惑わす。彼らは、以前の兄弟たちにとって、最も苦い敵となる」 大下294。

- **なぜ、多くの者が信仰（原文では立場）を捨てることになるのであろうか？次の文をよくよくかみしめて読んでいただきたい：**

「聖所と調査審判の問題は、神の民によってはっきりと理解されねばならない。すべての者は、自分たちの大なる大祭司キリストの立場と働きについて、自分で知っている必要がある。そうしなければ、この時代にあつて必要な信仰を働かせることも、神が彼らのために計画しておられる立場を止めることも出来なくなる」大下222。

答えは、明白である。キリストが今どこで何をしておられるか、その立場と働きを知的に理解しないからである。だからSDAとしての立場を失ってしまうのである。

- **敵が神の民に攻めてくる時：**

「大部分の者」が信仰を捨てる時が来る。SDAの（立場）を捨てる時が来る。その時は、その光輝を賞賛された多くの星が暗闇に消え去る」時である。「もみがらが雲のように風に」吹き去らされる時（5 T 8 1）である。「猛烈な嵐が容赦なくやってくる」時（8 T 3 1 5）である。その時教会は「落ちかかるように見える」2 SM 3 8 0。その時真の教会の最大の危機の時である。「危機と沈下が最高の時」である（5 T 2 0 9）。

アッスリアのセナケリブがユダヤに攻めてきたときのものであろう。その軍勢によって略奪、破壊がなされたときのことを考えてみよ（2列王18：13～19：34）。またハバククは北からの敵が神の民を攻めてくることについて次のように言っている：

「諸国民のうちの望み見て、驚け、そして怪しめ。わたしはあなたがたの日に一つの事をす。人がこの事を知らせても、あなたがたはどうい信じまい。見よ、わたしはカルデヤびとを興す。これはたけく、激しい国民であつて、地を縦横に行きめぐり、自分たちのものでないすみかを奪う」ハバクク1：5、6。

「地上の新しい勢力として、カルデヤ人を起こす（バビロン）。残忍で横暴なこの国民は、世界を踏みにじり、次々と征服する」

●神の民の逃れ場

最後の神の民—SDAに攻めてくるとき、神はご自分のために、逃れ場を用意なさるのであろうか？ 預言者ヨエルも北からの敵について記している（ヨエル2：20）。注目すべきことは、セナケリブは「ユダのすべての堅固な町々を取った」がエルサレムに入らなかったことである。

ヨエル書 2：32に神の救出の手を見る。

「すべて主の名を呼ぶ者は救われる。それは主が言われたように、シオンの山とエルサレムとに、のがれる者があるからである。その残った者のうちに、主のお召しになる者がある」

北の王が我々を攻めてくる時、我々を救う逃れ場は何であろうか？

「シオンの山とエルサレムにある。そこに神の住まいである聖所があった。シオンの山の聖所が逃れである。11：31には、日本語では「神殿と城郭（じょうかく）」と書いてあるが、「字義通りには、【逃れ場である聖所】という意味だそう。英文欽定訳では「力の聖所」訳されている。MODERN LANGUAGE訳では、Sanctuary's citadel（最後の）拠り所としている。この「力」という言葉はヘブライ語の「maoz」という言葉からきているという。それはまた、「避難（所）」「要塞」とも訳せる。リビング・バイブルでは「聖所」としている。

天のエルサレム、シオンの山、天の聖所が神の民の「力」「逃れ場」「要害」「城郭」である。（ヘブル10：19～）。神の民は信仰によって天の聖所の、全能者の陰に宿るとき、黄泉の力にも打ち勝つことができるのである。暗黒時代には、ローマ法王教によってそれが荒らされ、汚されたのである。信者から天の聖所で執り成しをされるイエス・キリストの知識を奪ったのであった。1844年になって神の民に聖所に関する光、真理が回復されたのである。

●聖所に逃れるものだけが救われる。

ダニエル8：14は実態のあがないの日に住んでいることを示している。そのあがないの日の間に最後のテストが起こるのである。昔、イスラエルはあがないの日には、全会衆が聖所の回りに集まって、断食と祈りと深い心の探索によって大祭司の働きに協力した。（レビレビ16；23：27～32；大下147～150；224）。そのようなことをしなかった人々は、イスラエルの民籍から断たれるのであった。

今日、実体の、「最後のあがない」の日に神の民は、信仰によって天の至聖所に集まるように招待されている。預言者ヨエルは次のように言っている：

「あなたがたは断食を聖別し、聖会を召集し、長老たちを集め、国の民をことごとくあなたがたの神、主の家に集め、主に向かって叫べ。．．．シオンでラッパを吹きならせ。断食を聖別し、聖会を召集し、民を集め、会衆を聖別し、老人たちを集め、幼な子、乳のみ子を集め、花婿をその家から呼びだし、花嫁をそのへやから呼びだせ。主に仕える祭司たちは、廊と祭壇との間で泣いて言え、「主よ、あなたの民をゆるし、あなたの嗣業をもらもろの国民のうちに、そしりと笑い草にさせないでください。どうしてもろもろの国民に、『彼らの神はどこにいるのか』と言わせてよいでしょうか」ヨエル 1：14、2：15～17。

E. G. ホワイトは次のように言っている：

「私は、多くの人々が集まっている神殿を見ている夢を見た。終末のときに、その神殿に逃れた人々だけが救われるのであった」初代文集 161。

●神の民は準備が出来ていない。

「重大な危機が神の民を待っている」「猛烈な嵐が容赦なくやってくる」(5T711、8T31)

「わたしは、残りの民が、この地上に起ころうとしていることのために準備していないのを見た。最後の使命を持っているという信仰を公言する人々の大部分は、昏睡状態のような無感覚に陥っている」初文 222。

最後のあがないの日の条件を果たしていないからである。

兄弟姉妹方！我々は、重大な危機が非常に切迫していることを感じているだろうか？永遠の運命を決定する事件、天では「生ける者の裁き」、地上では「日曜休業令」の足音を聞いているだろうか？

神の民は、セレブレーション礼拝に魅惑されていないだろうか？「主を賛美せよ、祝えよ」とパアル礼拝に陥っていないだろうか？

アイデンティティー・クライシス（独自性の喪失という危機）に我が教会も直面しているのではないか？

「これは一人離れて住む民」（民 23：9）であるはずなのに、妥協に妥協を重ねて、主を悲しませている事実をだれが否めよう。

●「我々の唯一の安全は神の特殊な民として立つことである」5T78

●ここで古代イスラエルと現代の霊的イスラエルの比較をしてみたい。古代イスラエルが「北の王」バビロンに攻められる前に、預言者エレミヤを送られた。当時のセブンスデー・アドベンチスト（第7日目安息日再臨信徒）は、預言者の警告にどのように対応しただろうか？

「我々の歴史とイスラエルの歴史との間には著しい類似点がある」4T217。

「サタンは現代の真理を信じると主張する者たちの経験の中にユダヤ国民の歴史が繰り返されるように働いている」2SM111。

「過去の歴史が繰り返される」1SM390。

★北からの災い：

「煮え立っているなべを見ます。北からこちらに向かっています」エレミヤ書1:13。

「災が北から起って、この地に住むすべての者の上に臨む」エレミヤ書1:14。

「シオンの方を示す旗を立てよ。非難せよ、とどまってはならない、わたしが北から災と大いなる破滅をこさせるからだ」エレミヤ書4:6。

「・・・避難せよ。テゴアでラッパを吹き、ベテハケレムに合図の火をあげよ。北から災が臨み、大いなる滅びが来るからである」エレミヤ書6:01。

「見よ、民が北の国から来る、大いなる国民が地の果から興る」エレミヤ書6:22。

エレミヤの時代の北からの災いはバビロンの攻略を意味していた。終わりの時代には、ローマ・カトリック=パチカンを意味する。

アドベンチスト焦燥の中にある民を慰めるために、「平和だ、無事だ、教会は霊的に繁栄している」と手軽に民の傷をいやそうとする手にのついていいものだろうか？（エレミヤ8:11）。神の民の強情な反応を見よ、現代イスラエルと何と似ていることか。

「あなたは言う、『わたしは罪がない。彼の怒りは、決してわたしに臨むことがない』と。あなたが『わたしは罪を犯さなかった』と言うことによって、わたしはあなたをさばくエレミヤ書2:35。

「彼らは、『主は生きておられる』と言うけれども、実は、偽って誓うのだ5:2。

「イスラエルは言わないのだ。『主はどこにおられるのか』と2:6。祭司たちも言わない。『主はどこにおられるのか』と2:8。

「彼らは主について偽り語って言った、『主は何事もなされない、災はわれわれに来ない、またつるぎや、ききんを見ることはない』エレミヤ書5:12。

彼らは、手軽にわたしの民の傷をいやし、平安がないのに『平安、平安』と言っている」エレミヤ書6:14。

「主はこう言われる、『あなたがたはわかれ道に立って、よく見、いにしへの道につき、良い道がどこかを尋ねて、その道に歩み、そしてあなたがたの魂のために、安息を得よ。しかし彼らは答えて、『われわれはその道に歩まない』と言った』エレミヤ書6:16。

「わたしはあなたがたの上に見張りとを立て、『ラッパの音に気をつけよ』と言った。しかし彼らは答えて、『われわれは気をつけることはしない』と言った』エレミヤ書6:17。

「わたしの名をもって、となえられるこの家に来てわたしの前に立ち、『われわれは救われた』と言い、しかもすべてこれら憎むべきことを行うのは、どうしたことか」エレミヤ書7:10。

「あなたがたは、『これは主の神殿だ、主の神殿だ、主の神殿だ』という偽りの言葉を頼みとしてはならない」エレミヤ書7:04。

「わたしはあなたがたに、『しきりに語ったけれども、あなたがたは聞かず、あなたがたを呼んだけれども答えなかった』エレミヤ書7:13。

「わたしは気をつけて聞いたが、彼らは正しくは語らなかった。その悪を悔いて、『わたしのした事は何か』という者はひとりもない。彼らはみな戦場に、はせ入る馬のように、自分のすきな道に向かう」エレミヤ書8:06。

「空のこうのとりの時でもその時を知り、山ばとと、つばめと、つるはその来る時を守る。しかしわが民は

主のおきてを知らないエレミヤ書8:07。

「どうしてあなたがたは、『われわれには知恵がある、主のおきてがある』と言うことができようか。見よ、まことに書記の偽りの筆がこれを偽りにしたのだ」エレミヤ書8:08。

「彼らは手軽に、わたしの民の傷をいやし、平安がないのに、『平安、平安』と言っている」エレミヤ書8:11。

「わたしは言った、「ああ、主なる神よ、預言者たちはこの民に向かい、『あなたがたは、つるぎを見ることはない。ききんもこない。わたしはこの所に確かな平安をあなたがたに与える』」と言っています」エレミヤ書14:13。

「預言者らはわたしの名によって偽りの預言をしている。わたしは彼らをつかわさなかった。また彼らに命じたこともなく、話したこともない。彼らは偽りの黙示と、役に立たない占い、および自分の心で作りあげた欺きをあなたがたに預言しているのだ」エレミヤ書14:14。

「それゆえ、わたしがつかわさないのに、わたしの名によって預言して、『つるぎとききんは、この地にこない』と言っているあの預言者について、主はこう仰せられる、この預言者らは、つるぎとききんに滅ぼされる」エレミヤ書14:15。

「あなたがたは言う、『だれが下ってきて、われわれを攻めるものか、だれがわれわれのいる所に、はいるものか』と」エレミヤ書21:13。

「彼らはむなしい望みをいだかせ、主の口から出たのでない、自分の心の黙示を語るのである」エレミヤ書23:16。

「彼らは主の言葉を軽んじる者に向かって絶えず、『あなたがたは平安を得る』と言い、また自分の強情な心にしたがって歩むすべての人に向かって、『あなたがたに災はこない』と言う」エレミヤ書23:17。

「預言者たちはわたしがつかわさなかったのに、彼らは走った。わたしが、彼らに告げなかったのに、彼らは預言した」エレミヤ書23:21。

「それは彼らがわたしの言葉に聞き従わなかったからであると主は言われる。わたしはこの言葉を、わたしのしもべである預言者たちによって、しきりに送ったが、あなたがたは聞こうとしなかったと主は言われる」エレミヤ書29:19。

「そのかしらたちは、まいないをとってさばき、その祭司たちは価をとって教え、その預言者たちは金をとって占う。しかもなお彼らは主に寄り頼んで、『主はわれわれの中におられるではないか』だから災はわれわれに臨むことがない」ミカ書3:11。

北からの敵（ローマ＝パチカン）が滅亡をもたらす前に、民は何をなすべきだろうか？

（ヨエル2：20）。後の雨が注がれる前に教会は何をすべきか？（ヨエル2：23～29）。主の言葉は明らかである。

昔のイスラエルは聖所のまわりに集まって何をしたか？ヨエル2：12～17節に書いていることは、（セレブレーション＝祝典）だろうか？心を裂いて身を悩ますために聖会を招集すべきではないか？誰に生ける神の印が押されるのだろうか？

エゼキエル9章には教会の悪を「嘆き悲しむ者にしるしをつけよ」とある。ヨエルは後の雨の前に廊と

祭壇との間で泣いて、心を裂かなければならないと言っているのだ。ゼパニヤは爆発的な祝典の前に（3：14～）、主を求め、謙遜を求め、義を求めよと言っているのだ（2：1～3）。E. G. ホワイトはこの聖句を日曜休業令に適応している（RH 1908, 11, 19）。ここでも日曜休業令は震いの時であることがわかる。さばきの時であることがわかる（3：8～）。

ゼカリヤは神の民が新しい祭服＝「光り輝く麻布の衣（黙19：7）」を着る前に、清い帽子＝冠（ダニエル7：18、22、27）＝神の印（5T475、国指195、196）を頂く前に苦悩と屈辱に会うというのだ。罪と汚れを清める泉が開かれる前に、彼らの嘆きは母マリヤが十字架で経験したようなものであろう（ゼカリヤ12：10～13：1；イザヤ4：3、4＝さばきの霊と焼き尽くす霊（英文））。

モーセは最後のあがない、もろもろの罪が清められる前に仕事を止め、断食し、身を悩ませと言っているのだ（レビ16：30～；23：26～）。

ベテロは罪の除去＝慰めの雨＝後の雨の前に悔い改めて本心に立ち返れと言っているのだ（使徒3：19、20）と言っているのだ。主イエスは婚姻に来れと言っているのだ（マタイ22章；25章：）。ヤコブはもろもろの国民の前に高くされる前に苦しみ、泣けと言っているのだ（ヤコブ4：8～10）。しかし、ラオデキヤは何と言っているのだろうか（黙3：15～）？

ああ、ダニエル9章の美しい祈りを学びたいものだ！

「すなわちわたしは、わが神、主に祈り、ざんげして言った、「ああ、大いなる恐るべき神、主、おのれを愛し、おのれの戒めを守る者のために契約を保ち、いつくしみを施される者よ、われわれは罪を犯し、悪をおこない、よこしまなふるまいをなし、そむいて、あなたの戒めと、おきてを離れました。われわれはまた、あなたのしもべなる預言者たちが、あなたの名をもって、われわれの王たち、君たち、先祖たち、および国のすべての民に告げた言葉に聞き従いませんでした。主よ正義はあなたのものですが、恥はわれわれに加えられて、今日のような有様です。すなわちユダの人々、エルサレムの住民および全イスラエルの者は、近き者も、遠き者もみな、あなたが追いやられたすべての国々で恥をこうむりました。これは彼らがあなたにそむいて犯した罪によるのです。

主よ、恥はわれわれのもの、われわれの王たち、君たちおよび先祖たちのものです。これはわれわれがあなたにむかって罪を犯したからです。あわれみと、ゆるしはわれわれの神、主のものです。これはわれわれが彼にそむいたからです。またわれわれの神、主のみ声に聞き従わず、主がそのしもべ預言者たちによって、われわれの前に賜った律法を行わなかったからです。まことにイスラエルの人々は皆あなたの律法を犯し、離れ去って、あなたのみ声に聞き従わなかったので、神のしもべモーセの律法にしろされたのろいと誓いが、われわれの上に注ぎかかりました。これはわれわれが神にむかって罪を犯したからです。すなわち神は大いなる災をわれわれの上にくだして、さきにわれわれと、われわれを治めたつかさたちにむかって告げられた言葉を実行されたのです。あのエルサレムに臨んだような事は、全天下にいまだかつてなかった事です。モーセの律法にしろされたように、この災いはすべてわれわれに臨みましたが、なおわれわれの神、主の恵を請い求めることをせず、その不義を離れて、あなたの真理を悟ることをもしませんでした。それゆえ、主はこれを心に留めて、災いをわれわれに下されたのです。われわれの神、主は、何事をされるにも、正しくあらせられます。ところが、われわれはそのみ声に聞き従わなかったのです。

われわれの神、主よ、あなたは強きみ手をもって、あなたの民をエジプトの地から導き出し、今日のように、み名をあげられました。われわれは罪を犯し、よこしまなふるまいをしました。主よ、どうぞあなたが、これまで正しいみわざをなされたように、あなたの町エルサレム、あなたの聖なる山から、あなたの怒りと憤りをとを取り去ってください。これはわれわれの罪と、われわれの先祖の不義のために、エルサレムと、あなたの民が、われわれの周囲の者の物笑いとなったからです。それゆえ、われわれの神よ、しもべの祈と願いを聞いてください。

主よ、あなたご自身のために、あの荒れたあなたの聖所に、あなたのみ顔を輝かせてください。わが神よ、耳を傾けて聞いてください。目を開いて、われわれの荒れたさまを見、み名をもってとなえられる町をごらんください。われわれがあなたの前に祈をささげるのは、われわれの義によるのではなく、ただあなたの大いなるあわれみによるのです。主よ、聞いてください。主よ、ゆるしてください。主よ、み心に留めて、おこなってください。わが神よ、あなたご自身のために、これを延ばさないでください。あなたの町と、あなたの民は、み名をもってとなえられているからです」。

これこそラオデキヤである我々に望まれている祈り、また学ばねばならない祈りではないだろうか？

1. 私たちも、先祖たちも罪を犯したことを懺悔する。神に聞き従ってこなかったことを認める。ラオデキヤはその事を認めないから致命的なのだ。預言の言葉を軽視し、1888年のメッセージを拒んでいながら、受け入れた、勝利したという。
2. 「あなたご自身のために」一神のご品性の擁護のために神の約束が我々の内に、外に果たされるように祈る時なのだ。
3. 我々の義は塵に伏させ、神のあわれみによって祈りをささげよう。
4. 神の約束を延ばさないでくださいと真剣に祈ろう。主ご自身のためなのだ。「もう時がない」はずだ。こんなに時が延ばされているのは、「神のみ旨ではなかった」我々の不信仰、不服従の故なのだ。

「様々な偽装のもとに、**イエズス会**の会員たちは、国政にまで手を伸ばし、国王の顧問の地位について、国家の政策をまとめた。また、人々の様子を探るために、その僕となった。彼らは、王候、貴族の子弟のための大学を設立し、一般の国民のための学校を建てた」大下294

「歴史は、(ローマ)教会がたくみに根気よく国事に入り込む努力を続け、…」大下339

「ローマ教会は黙々としてその勢力をのぼしつつある。その教えは、議会に、教会に、また人々の心に影響を及ぼしている。…自分が手を下すときが来たら自分自身の目的を押し進めるために、教会は、ひそかに、そしてあやしまれないように、勢力をのぼしつつある。この教会が何よりも望むものは、有利な立場である」大下341

★ ローマ・カトリックは日本に、エリートを通して働きかけるといわれている。

上智大学は日本のブレインを育てるところ。イエズス会の大学。

★ 日本の皇室にどれほど影響を及ぼしているだろうか？

皇后陛下は聖心女学院のご出身。

現皇太子妃の、雅子様もカトリックの学校ご出身。

★ クリントン米大統領は、イエズス会大学の母体、ジョージタウン大学の出身。

1994.1.14

細川首相 似顔 二月十一日の日米首脳会談のため訪米した際、ワシントンのジョージタウン大学で講演し、米国民向けに日本の外交方針や政治改革について、直接英語で語りかけることになった。外務省筋が十三日、明らかにした。ジョージタウン大学は米東部の名門校で、クリントン米大統領の母校。首相の



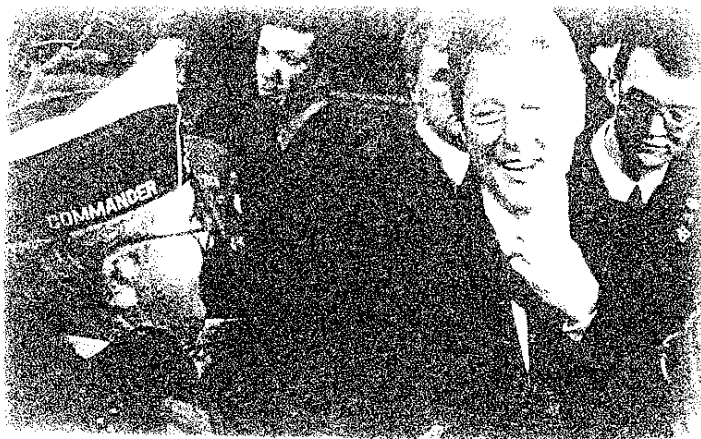

母校の後輩から花束を贈られる細川首相夫妻

首相 来月の訪米時 大統領の母校で講演

—ジョージタウン大—

母校の上智大学とは同じキリスト教イエズス会系列で、留学生や教員の交流を進めているなど関係が深いことから、首相が自ら講演会場として白羽の矢を立てたという。

首相はこの演説で、日米関係の重要性を中心とした外交政策を中心に、政治改革や行財政改革など、細川政権が取り組んでいる「生活者優先の政策」について説明する。時間は「三十分程度を予定、米国の文化芸術についての首相個人の感想も含まれる見通しだ。



テープについてのお知らせ：

● 水野源三の詩に見る信仰のダイナミック (74分) ¥500 (送料含み)

★ 水野源三の詩に見る信仰の経験—神の慈愛に悔い改め、義認の経験、日毎に新たな感動が深くなっていく。彼の義への飢え渴き、罪深さの意識は「私のための十字架」で止るのでなく、「わたしがイエスを十字架につけた」と絶叫させる。自我の心を「砕いて、砕いて、砕き給え」と歌う。彼はイエスにあつて安らかに眠りについた。豊かな先の雨の経験は、彼が死んで後さばきを受け、「最後のあがない」で罪が全く除去され、再臨の時にまったき品性をもって復活するのであろう。生きて主を迎える民は彼のような先の雨の経験をしなければ、さらに豊かな「後の雨」「最後のあがない」の祝福にあずかれない。彼の詩と、歌3曲を加えた現代的メッセージ。

◆ SDAでない方のためにも編集中

● 逆境の効用 (60分) ¥500

★ 困難、試練、逆境は、私たちが墮落から救う神が定めた手段であるとするなら、最後の民に待っている逆境にどのように対応したらいいか？「神の国に入るためには多くの苦難を経なければならぬ」

● 信心の訓練 (90分) ¥500

★ なぜ、宗教的な生活が困難なのだろう？主に仕えることは骨のおれる、困難な仕事のように思える理由は何か？信心の訓練は「精通しなければならないキリスト教の科学」であると言われている。

● 生ける宮 (90分) ¥500

★ 1993年4期のSS教課は、「エズラ、ネヘミヤの研究」であった。昔のイスラエルの捕囚、脱バビロン、エルサレムの神殿、宮建設は現代の神の民セブンスデー・アドベンチストにとってどんな重要な意味があるか？これを見失ったら、昔のイスラエルと同じ運命を刈り取る。

● 「新世界秩序」への序曲 (60分) ¥500

★ 湾岸戦争、PKO、米輸入問題、世界の政変、経済崩壊、地球環境の危機、宗教会議、アメリカの動き、...はいよいよ「新世界秩序構築」への序曲なのだ。世界支配を狙っているパチカンとアメリカはその目的達成のために追込みの段階に入った。

◆ 未信者のためのものだが、信者にもよい。

● 「今も主は導かれる」 安富祖すが子の証と金城重博のメッセージ (60分) ¥500

★ カリフォルニア・サンファナンド大地震も逃れた。大都会を出てほんともよかった。神の忍耐強い導きに従おう。

★ 今この印刷物は信徒によるもので、皆様の祈りと自由献金によって続けられています。

1部350円ほどの献金をお願いできれば幸いです。尚、資料代や献金などの送金には郵便振替をご利用ください。振替口座番号は下記のとおりです。

鹿児島 8-12121 サンライズ・ミニストリー

TEL 0980-56-2783
FAX

住所〒 905-04 沖縄県国頭村今帰仁村今泊1471番地

サンライズ・ミニストリー アンカー係 編集人 金城重博

神の約束！

苦境、危急の時に：

「我々もまた**困難な立場**におちいった時には、神により頼むべきである。我々は、向こう見ずな行動によって苦境におちいることがないように、人生のひとつひとつの行為に知恵と判断とを働かすべきである。神がお備えになった手段を無視し、神が我々にお与えになった才能をまちがったことに用いて、**困難**にとび込むことがあってはならない。キリストの働き人は、絶対的にキリストの教えに従うべきである。この働きは神の働きである。だから他人の祝福になりたければ、神のご計画に従わねばならない。自我を中心とすることはできない。自我が誉を受けることはできない。もし**我々が自分自身の考え**にしたがって計画すれば、主は、我々を我々自身の誤りの中に放置される。しかし、神の指示に従っていて、それでも**苦境**におちいるようなことがあれば、神は、我々を救って下さる。我々は落胆してあきらめてしまわないで、どんな危急のときにも、無限にどんな手段でもお用いになれる神の助けを求めべきである。我々は、しばしば**きびしい境遇**にとりかこまれることがあるが、そういう時こそ絶対の信頼心をもって神により頼まねばならない。神は、主の道に従おうとして困難におちいつている魂をひとりももれなく守ってくださる。」